

長野県松本市

TAKAMIYA

高宮遺跡Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

1999.3

松本市教育委員会

長野県松本市

TAKAMIYA

高宮遺跡 II

—緊急発掘調査報告書—

1999.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成9年4月16日から平成9年6月9日にかけておこなわれた長野県松本市高宮に所在する高宮遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は株式会社 信州生活互助会が結婚式場及び宿泊施設を建設するのに伴って松本市教育委員会がおこなったものである。
- 3 本調査は高宮遺跡における第2次調査に相当する。第1次調査は平成5年度に行われた。
- 4 今回の遺構番号は1次調査からの続き番号を使用し、以下のとおりとなっている
住居址：第4号住居址～第8号住居址
土 坑：土坑13～土坑54
ピット：ピット14～ピット62
溝 溝：溝1
流 路：流路2～流路3
土器集中区：土器集中区16
ただし、土坑22・38～44・46・47・50・53は調査の都合で欠番となっている。また、整理段階で遺構名称が変更になったものは次のとおり。遺物の注記は旧名称で行われている。
(旧) 第9号住居址 → (新) 第8号住居址
(旧) 土坑55・57・58 → (新) 第4号住居址掘り方
- 5 本書の執筆分担は次の通りである。
第1章：事務局
第2章 第1節：太田守夫
第3章 第3節1・3・4：直井雅尚
第3章 第3節2：太田圭郁
上記以外：村田昇司
- 6 本書の作成・編集にあたっての作業分担は次の通りである。
遺物洗浄接合：五十嵐周子、内沢紀代子、百瀬二三子
遺 物 実 測：(土器) 松尾明恵、横山真理、竹平悦子、竹原 学、(石器) 太田圭郁
遺物トレース：(土器) 松尾明恵、横山真理、(石器) 太田圭郁
遺 構 図 整 理：石合英子
遺構トレース：開嶋八重子、横山真理
写 真 撮 影：神田訓安、村田昇司(遺構・現場)、横山和明(遺物)
総 括・編 集：直井雅尚、村田昇司
- 7 本遺跡の調査及び本書の執筆・作成にあたって次の方々のご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
青木一男、飯島哲也、太田守夫、風間栄一、高桑俊雄、土屋 積、前島 卓、森 義直、山下誠一、東国土器研究会
- 8 本調査の出土遺物及び現場で作成した測量図、写真などの諸記録は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館に収蔵されている。
松本市立考古博物館：〒390-0823 長野県松本市大字中山3738番地1 TEL0263-86-4710

序

高宮遺跡は市街地南部の宅地化が進んでいる地区に位置します。本遺跡は平成5年度に初めて発掘調査が行われ、古墳時代中期の祭祀に関わる重要な遺跡であることが判かりました。

このたび当地にザ・グランドティアラ松本高砂殿（結婚式場及び宿泊施設）の建設事業が計画されたため、松本市が（株）信州互助会から発掘調査の委託を受け、埋蔵文化財の保護を図るため緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は市教育委員会によって、平成9年4月から6月にかけて行われました。作業は梅雨空のもと降雨に悩まされましたが、関係者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、古墳時代の生活の跡を見出すことができました。特に古墳時代中期の祭祀遺構と思われる土器集中区ほか、同時代の貴重な遺物も多数得ることができました。これらは、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることと思われます。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産がうしなわてしまうことは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつ解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた皆様、そして地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

松本市教育委員会 教育長 竹淵 公章

目 次

序

例言

目次

第1章 調査の経緯

- 1 調査に至る経過 2
- 2 調査体制 2

第2章 遺跡の環境

- 第1節 遺跡の立地と地形・地質 3
- 第2節 歴史的環境 6

第3章 調査結果

- 第1節 調査の概要 11
 - 第2節 遺構
 - 1 竪穴住居址 12
 - 2 土坑・ピット 13
 - 3 溝・流路 14
 - 4 土器集中区 15
 - 第3節 遺物
 - 1 土器 17
 - 2 石器 18
 - 3 玉類 19
 - 4 その他の遺物 20
- 第4章 調査のまとめ 22

挿図目次

- 第1図 土層柱状図5
- 第2図 流路2断面図 5
- 第3図 調査地の位置と周辺遺跡 7
- 第4図 調査位置図8
- 第5図 調査範囲図9
- 第6図 遺構配置図10

図版目次

- 図版1 第4号・第8号住居址 29
- 図版2 第5号・第6号住居址 30
- 図版3 第7号住居址・同遺物出土図 31
- 図版4 土坑(1) 32
- 図版5 土坑(2)・溝・土器集中区 33
- 図版6 流路2 34
- 図版7~13 遺物 35~41

表目次

- 第1表 住居址一覧表 15
- 第2表 土坑一覧表 16
- 第3表 礫石錘計測表 20
- 第4表 石器実測図掲載個体属性一覧 21
- 第5表 器種単位石材組成 21
- 第6表 遺構・石材単位器種組成 21
- 第7表 玉類計測表 23
- 第8表 土器・土製品一覧表 24~28

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経過

松本市のほぼ中央に位置する南松本周辺は、近年、新たな商業地域として注目され始め、大型ビル建築に伴い、遺跡・遺構の発見が相次いでいる地域である。こうした情勢のなか、平成7年、国道19号線沿いの松本市高宮東1番（高宮213番地）に結婚式場および宿泊施設の建築事業計画が明らかになった。当該地は長野県下でも非常に珍しい水辺祭祀遺構を検出した高宮遺跡第1次調査地に近接していたことから、松本市教育委員会は開発者の（株）信州生活互助会と埋蔵文化財保護のための協議を行い、まず、建設予定地内に試掘調査を行い、本調査の範囲を確認することとした。

試掘期間は平成8年2月12日より2月20日までと、2月27日より3月4日までの2回、建設予定地に11本の試掘トレンチを入れて実施した。その結果、一部に遺構・遺物が確認されたため、再度両者間で協議を行い、建築予定地のうち遺構・遺物が認められた範囲に調査区を限定して、発掘調査を実施し記録保存することとなった。平成9年4月14日付で、松本市教育委員会と（株）信州生活互助会と松本市の間で、発掘調査業務の委託契約を締結し、松本市教育委員会が発掘作業を実施する運びとなった。松本市教育委員会では、次節のような発掘調査団を組織して、平成9年4月16日より同年6月9日まで現地における調査を実施。終了後、平成10年5月29日より平成11年3月31日まで、整理・報告書作成の契約を締結し同作業をおこなった。

2 調査体制

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者 神田訓安、長橋重幸、高桑俊雄、村田昇司（文化課文化財担当）

調査員 太田守夫、松尾明恵

協力者 青木雅志、浅井信興、浅輪敬二、荒井留美子、五十嵐周子、石合英子、石井脩二、市場茂男、伊藤幸司、入山正男、上兼昭一、内沢紀代子、大月八十喜、開嶋八重子、上条尚美、神田栄次、清沢智恵、河野清司、小松正子、斎藤政雄、鷺見昇司、竹平悦子、中村安雄、中山自子、林 和子、林 武佐、藤本利子、布野行雄、布山洋、洞沢文江、丸山恵子、三代沢二三恵、村山牧枝、甕 国成、百瀬二三子、百瀬義友、横山 清、横山真理、吉田 勝、米山禎興

事務局

平成9年度

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）
村田正幸（文化財担当係長）、田多井用章、近藤 潔、川上真澄

平成10年度

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）
村田正幸（文化財担当係長）、久保田剛、近藤 潔、上条まゆみ

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地形・地質

1 位置と地形

本調査地は松本市高宮東、国道19号線街路東側の施設の跡地内にある。標高およそ588 m、高宮遺跡1次調査地の東200 m、出川遺跡3次調査地点の北200 mにあたり、この付近一帯は第2次大戦前後までは、湧水に恵まれ水利の良い稲作地域であった。その後国道19号線の開通に伴い、にわかに都市化し、自然地形の展望は困難になった。

地形上は松本市に流入する諸河川の複合による、沖積扇状地性堆積や三角州性の堆積の南西部に当たり、現在は主として奈良井川の影響を受けている。西の奈良井川現河床との距離はおよそ1500 m。東の田川現河床との距離はおよそ950 mで、その間に湧水の排水河川（現在は生活排水）である穴田川を挟んでいる。地形面は北北東へ極めて緩く傾斜（5/1000）し、地下水位が高い。かつては多くの湧水口が見られる扇端に当たり、細粒堆積物の厚さは5～10 mと報告されている。

多くの湧水口は、現在埋め立てられてみられないが、市街化する以前の地形図には、湧水口やこれを集めた流れが、街道沿い北へ流れ、穴田川へ入った状況が窺える。この湧水は多く夏季に盛んで、浅い層の伏流水と見られる。夏季は湿田状となり、暗渠排水や排水路に苦労したという。従って夏季だけの湿田となることが多いので、腐植は植物の遺体として残りにくい。本調査地でも、全面にわたり暗渠排水や排水路の状態で発掘されている。現在、上流域での水田減少、深井戸の普及で減水し灌漑は深井戸揚水に移っている。

2 地層と堆積

この地域の堆積層は奈良井川（中・古生層系統）による砂質土・砂質粘土・砂礫層からなっている。前記の三角州性の厚い細粒堆積物に、それぞれの時期に応じた砂礫層（流れ）が貫入していると見られる。本調査地を概観すると、西半分では挿図1で見られるように砂質粘土層が発達し、古墳時代の住居跡、その後には設けられた水田下の多くの暗渠排水路が目立つ。東半分では東部の住宅地を含めて、砂礫層の分布が目立つ。地形的には幅20 m程の南北性の凹地が見られ、その中に溝1・2、自然流路、水路、断続的な礫層が存在する。このような状態は南の出川遺跡3次調査の地層面ともよく似ている。

西半部の地層は、表土の下は20～40cmの灰色、ぬれると黒灰色の粘土あるいは砂質粘土の互層からなり、下部は砂礫土に変わっている（第1図）。粘土層の中には鉄分の沈着をみるものもあり、水田に利用されたことが分かる。古墳時代の住居跡はこの粘土層の下底近く50～60cmに営まれたものと思われ、多くの暗渠はその後に行われた施設である。暗渠は相互につながられて東へ流れ、溝1・2や自然流路の存在を暗示させる。暗渠排水に用いられている石は、砂岩の20×10×22～3cm大の円形、長楕円形、卵形の扁平な石が多い。

これに対し東半部の地層は複雑で変化に富んでいる。これを形成順に見ると、①流路2、②流路3、と考えられる。

発掘地の南東隅の流路2は南北の長さ20m、東西幅最長4.5m、最短的3 mの規模を測り、方向は南西（S 20° W）—南北—北北東（N 10° E）、北東側の住宅地（発掘地外）の下を流路3に通じているものと考えられる。深さ1 mの溝のトレンチやベルトによると、基底の砂礫層の凹地形（傾斜角10～15°）へ9層の堆積層が相互併入し、複雑な互層をつくっている。この堆積層を形成順（下層から）に見ていくと次のとおりである（第2図）。

- ①砂礫層 本調査地の広い範囲の基底層。西壁（試掘）の基本土層では表面から1mの深さにあるが、60cmの浅い場所もある。流路2では挿図で見るように緩い傾斜度（西15°、東10°）をもつ浸食谷をつくる。中心の深さは表面から122cmである。礫は中礫が目立つ。厚さ30cm以上。
- ②礫混じり砂質灰色土 厚さ6～18cm。西側に存在。溝への最初の埋積土で基本土層中にも見える。
- ③砂質灰色土 厚さ6～18cm。東側で溝への最初の埋積土で基本土層中にも見える。④・⑤の下層にあった残片とも考えられる。弥生時代の遺物を含む。
- ④暗灰色土 厚さ10～20cm。遺跡の検出面ともなった土層で広く分布し、古墳時代の遺構・遺物を包含しているが溝内にはなく、5層の堆積に関係を持つと考えられる。
- ⑤砂層を含む灰色土 厚さ16～30cm。中に底から東西に延びた河床への埋積土。東側は切られているが、西側は下底15°、上部10°の傾斜度を示す土層で、砂層と僅かの炭化物を含む。上部・下部に暗褐色ブロックを混入し、鉄分の沈殿が見られる。中心底付近で2層・3層を欠くのは、最初の流れに洗われてしまったのであろう。上部に古墳時代、下部に弥生時代の遺物を含むのは、3層の残存と4層からの供給と考えられる。
- ⑥灰色土 厚さ10～24cm。西側に存在。傾斜度上部10～5°。5層を覆って堆積した土層。上部に暗褐色ブロックが広く混入し、鉄分の沈殿がある。この土層の時、中心底を1m東へ移して流れている。現在その東側に対称の層を欠き、上の層の7層暗灰色土や8層の暗灰色土となっている。
- ⑦暗灰色土 厚さ14～54cm。最も広い範囲に及び、ほとんどの下層を覆っている。時期的に溝を一応埋め尽くし、さらに上部は削はくを受けている（不整合面）。
- ⑧暗灰色土 厚さ10～34cm。東側に存在。7層の不整合面を覆って堆積したもので、基本土層の上層の灰色粘土層に当たる。発掘時に検出面まで掘り下げたため除去されている。溝内では河床の中心の移動があって、7層の東側を埋めている。また7・8層の上面には浅い河床と見られる小さなくぼみが残されている。
- ⑨砂層 厚さ18～34cm。東側に存在。10層の下、8層を部分的に覆って広がる。溝内では溝に沿って東側、西側双方に分布する。流路3でも同じ条件のもとに広がっている。恐らく10層の堆積前にあった浅い溝への堆積であろう。この砂層は西からの暗渠により8住とともに大きく切られていて溝の成立の時代を窺わせる。
- ⑩灰色土 厚さ32cm。本調査地の最上層で、ぬれると黒灰色になる。水田に利用された上層で、溝最後の壁面として残る。

以上により、流路2の形成とその後の変化および埋積の状況が観察でき、また他の堆積土層との対比が可能になってくる。

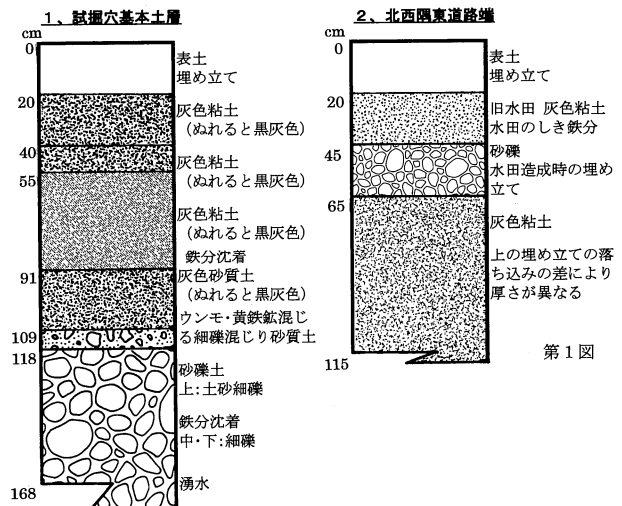
これに対し北東隅の凹部には、流路3、自然流路、暗渠排水が集中し、複雑になっている。これらはいずれも南に続く未調査の住宅地下へつながるもので、その延長は南を指向している。ただ流路3だけはN10°Eを指向し、流路の延長N10°Eに続くと思われる。その間の距離はおよそ25mである。流路3の土層は一搬に砂質で厚く、北壁で85cm、両壁で60～68cmである。土層下の砂礫層は径20cm以下の硬砂岩・砂岩・けい岩・チャートの中礫と、粘板岩・砂岩・チャート・けい岩の細礫からなっている。一方、東壁（道路端）では、上から、①埋め立て～砂礫混じり20cm、②旧水田面と鉄分20～25cm、③砂礫層～水田を造成した時の底の埋め立て。鉄分をもち、下層にくいこむ10～20cm、④土層30～50cm（第1図）、以下未調査であるが、土層の下1mの前後に砂礫層があることは共通している。また土層の深さ60cm近くまでが水田耕作に利用されたもので、水田の底の固め、暗渠排水、水利等の施設は何回か繰り返されていたものであろう。住居跡はこの水田利用の底との接触面付近にあったといえる。北東隅の暗渠は南北性が目立ち、一部東西性と切り合っていて、造成の前後が分かり、木の利用のほか土管も出土している。南北性の発達 は地形によるものであろう。自然流路は暗渠に切られ、また砂層の発達が溝1に似ているため、流路2の後と思われる。水路

は暗渠との関係が不明であるが、恐らく最終のものと考えたい。自然流路は調査時には既に埋め戻されてい
て詳しく観察することができなかった。また、発掘地中央を南北に、まとまった河床礫のたまりが3か所み
られた。いずれも新鮮な中・細礫（10×10cm最大）の集まりである（流路3北端、6住近く、その北約10m
地点、調査区北壁近く）。精査ができなかったが、その並び方から一連の流れとも思われるが、かつての湧水
口の堆積と見た方が適当かもしれない。

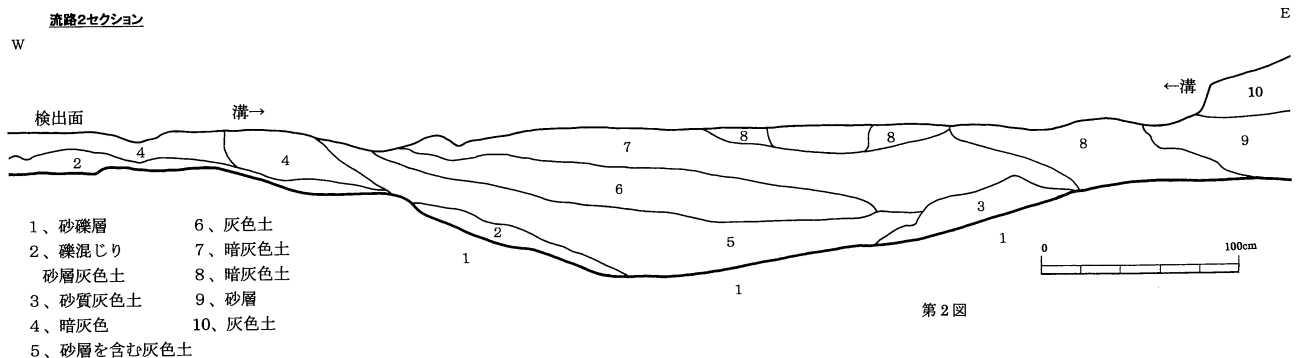
3 地形の形成と遺跡

本調査の堆積面は前に述べたように、沖積性扇状地の末端における三角州性の堆積で、それぞれの環境に
応じた層の堆積を重ねたものである。発達した暗渠に覆われた、低湿性や滞水性の地域は、豊富な湧水期と
関係をもち、多くの古墳時代住居跡を並べた地層は、気候的な減水期だったともいえる。地形変化による低
湿地面積の減少は古墳時代の生活域になりえたと考えられる。この状態は出川南遺跡3次調査地点（平成元
年調査）の発掘や、高宮遺跡1次調査地点（平成5年調査）などで観察できた沖積性扇状地末端の三角州性堆
積に共通している。基底の砂礫層は上層の砂礫層に対し、広範囲に共通するもので、ある規模の大きい砂礫
の堆積時期が考えられ、弥生時代の遺物の堆積の後である。

次に地形の形成順を概観すると、①基底の砂礫層
の堆積、②流路2・3の形成（減水期と浸食）、③礫
混じり砂質灰色土の堆積、④暗灰色土の堆積、⑤溝
内に砂質灰色土と砂層を含む灰色土の堆積（河床底
に弥生時代の遺物）、⑥暗灰色土層に古墳時代の遺構
と遺物、溝内の砂層を含む灰色土の上部に古墳時代
の遺物、⑦溝の変化（河床の中心の移動と進む埋積）、
⑧上層の灰色土の堆積と低湿地の形成、⑨豊水期～
湧水、⑩水田化と暗渠排水、⑪市街地～埋め立て、と
なる。



第1図 土層柱状図



第2図 流路2断面図

第2節 歴史的環境（高宮遺跡の周辺）

本調査地点のある高宮地区とその周辺は、奈良井川と田川に挟まれた平坦で、しかも湧水点の多い地域である。この地区は長い間、遺跡の確認が遅れていた地域であったが、近年の相次ぐ開発に伴う発掘調査の進展により、南部を中心に弥生時代から平安時代の遺跡・遺構の発見が相次ぎ、原始・古代の状況が大きく塗り替えられようとしている。調査が行われた遺跡を列挙してみても、本遺跡を北限として高宮遺跡1次調査地区（第3図1。以下「第3図」は略）、小島遺跡（2）、出川遺跡（3）、出川西遺跡（4）、出川南遺跡（5）、平田北遺跡（6）、五輪遺跡（7）、野溝遺跡（8）、平田遺跡（9）、平田本郷遺跡（10）、小原遺跡（11）、高畑遺跡（12）とその数は多い。

このうち、発掘調査によって大きな成果があがった遺跡について次に概観してみたい。まず、高宮遺跡1次調査地点（H5調査）である。この遺跡は今調査地点よりも250 m西に位置しており、古墳時代中期の住居址3軒と該期の祭祀遺構と思われる遺構を確認した。特に1号土器集中区には5×8mの狭い範囲に400個以上の土器類がぎっしりと集められ、5000個以上の玉類の他、玉・鏡の土製模造品、木製の櫛等も出土。長野県下でも珍しい水際の祭祀遺跡の発見となった。

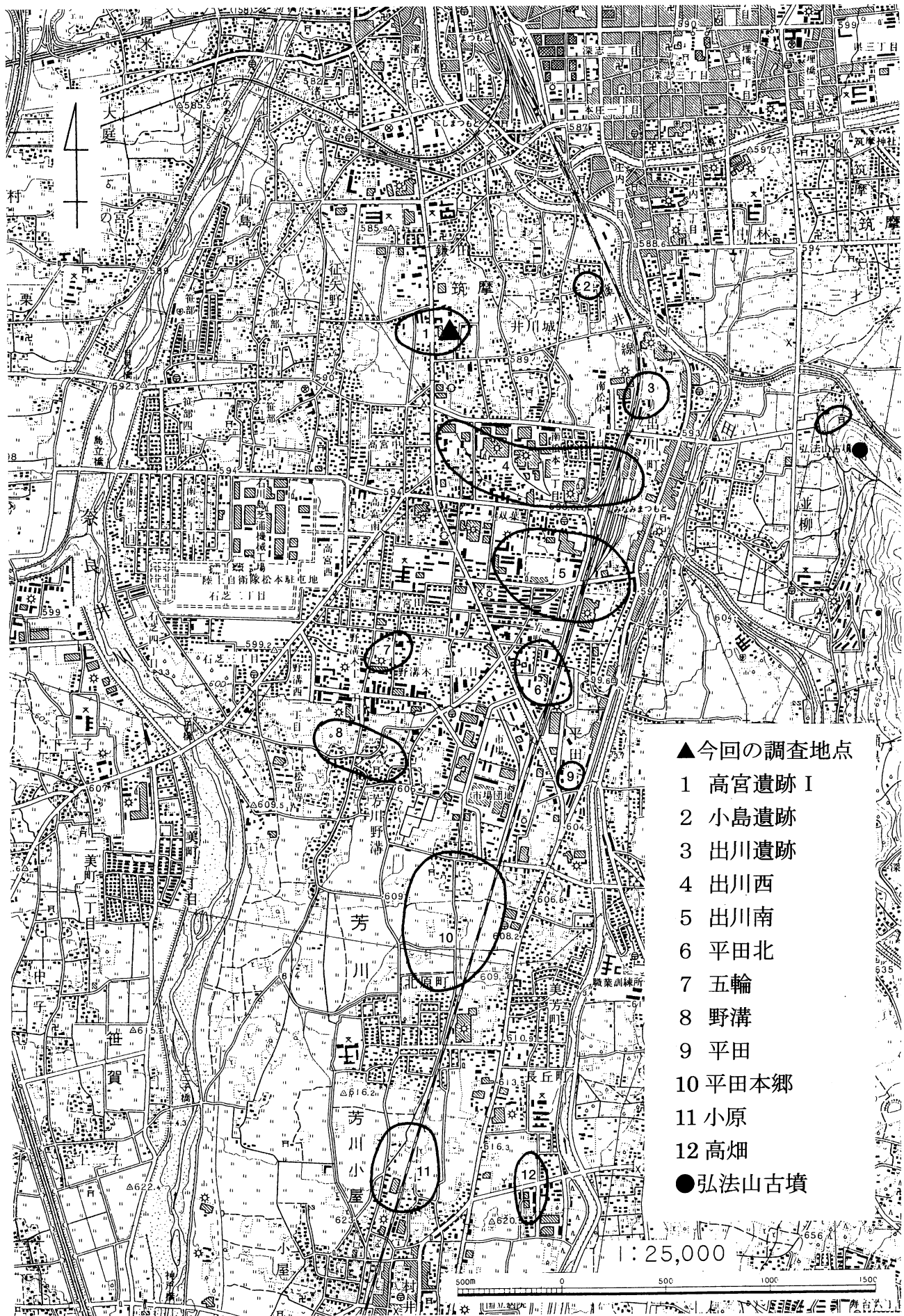
出川西遺跡（S61・H5・H7・H8、6回に亘る調査）は、南松本駅から国道19号線にかけての広範囲の遺跡であり、まず、東部の南松本駅周辺からは、弥生時代の磨製石鏃等の遺物を採集。該期と古墳時代・平安時代の住居址も発見した。一方、西部の国道19号線沿いからは古墳時代中期の配石遺構と窪地のなかに点々と何か所かの土器集中区を発見した。それに伴い出土した遺物は、何個体もの土師器とTK73窯式に相当する初期須恵器1点である。

出川南遺跡（S61・S63・H元・H3・H10、5回に亘る調査）では、H3の調査において古墳時代後期の住居址を約120軒発見。該期の遺跡としては松本平最大級の集落址であり、同時に5世紀後半～7世紀の古墳も3基発見、特に1基の周溝からは埴輪の破片が多量に出土した。これらの埴輪の発見は松本平唯一であり、大変貴重である。また、この出川南遺跡に隣接するキッセイ薬品工業敷地内の平田北遺跡（H4・H5・H6の5回に亘る調査）でも、古墳時代中期から平安時代末期までの住居址が14軒、掘立柱建物址が5軒出土し、この地にも長期間に亘り集落が形成されていたことを窺わせる。

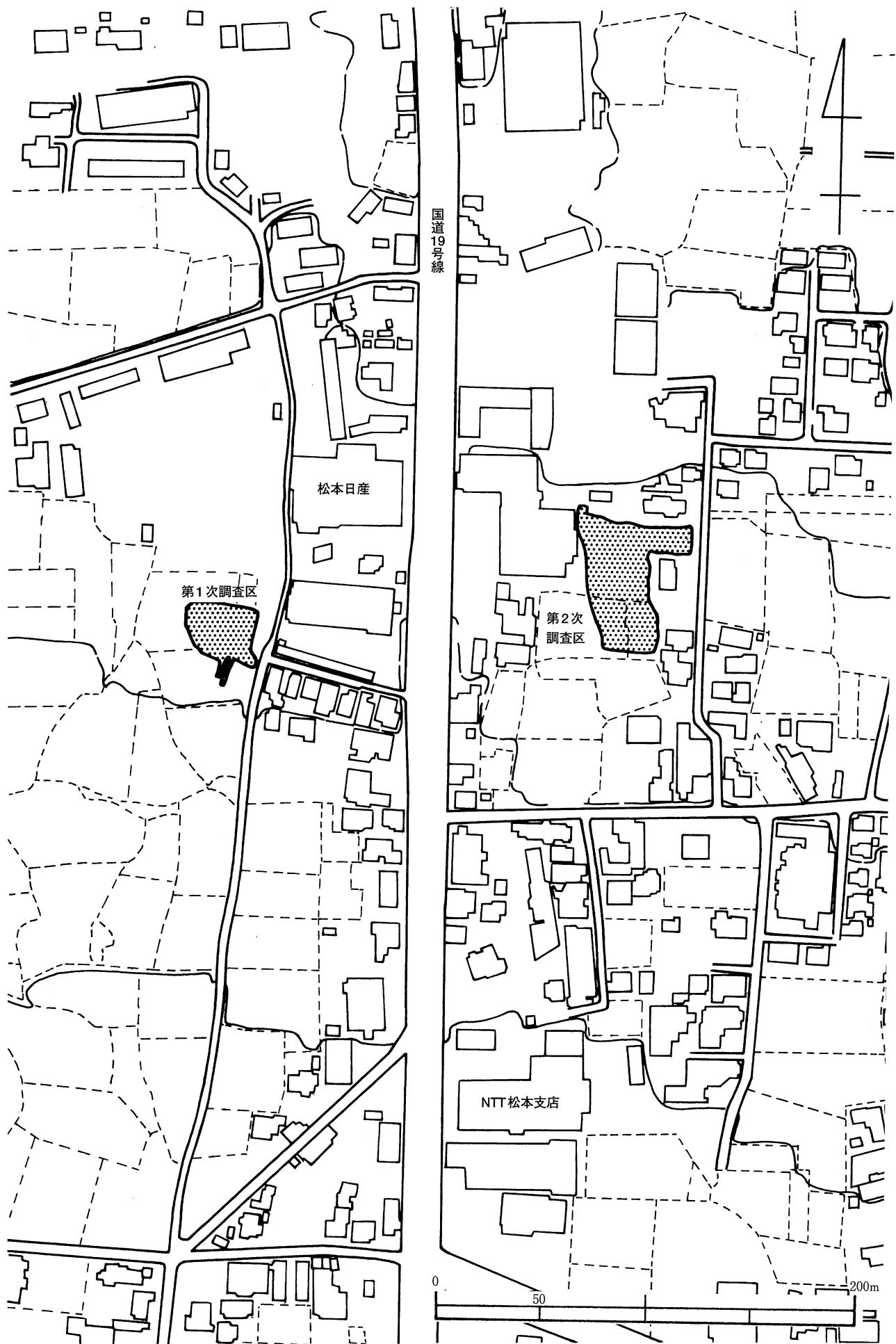
平田本郷遺跡（H4・H6・H9の3回に亘る調査）も奈良時代から平安時代末期の住居が出土した複合遺跡であり、これまでに約170軒近くの住居址が検出されている。H4・H6の調査においては、奈良時代から平安時代前期を中心とする集落址を調査、特殊な文字の入った墨書土器や多数の鉄器が出土した。須恵器の大甕の埋設遺構もあり、長い間この地域に大きな集落が存在していたことを窺わせる。一方、H9の調査はH4・H6の調査地点の南500mに位置し、時期的にも先の調査とは異なった11C～12C代の平安時代後期集落址であり、南松本一帯の弥生・古墳・平安初期の遺跡群の南限、平安時代前期から後期の開拓史の境界線を想定することができよう。

参考文献

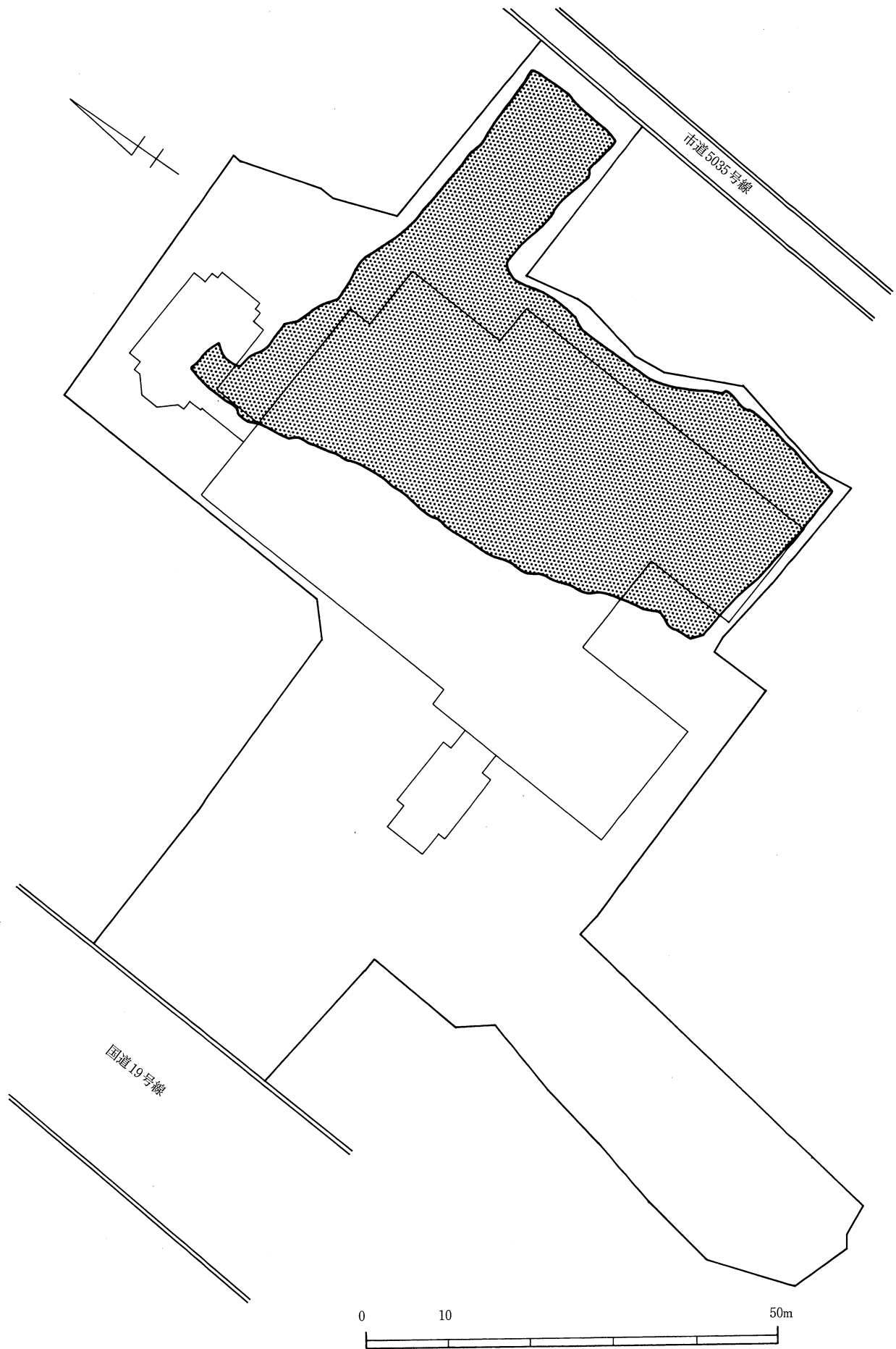
- 藤沢宗平他1973『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』東筑摩郡・松本市・塩尻市誌郷土資料編纂会
神沢昌二郎他1993『松本市史 第四巻 旧市町村編Ⅲ』松本市



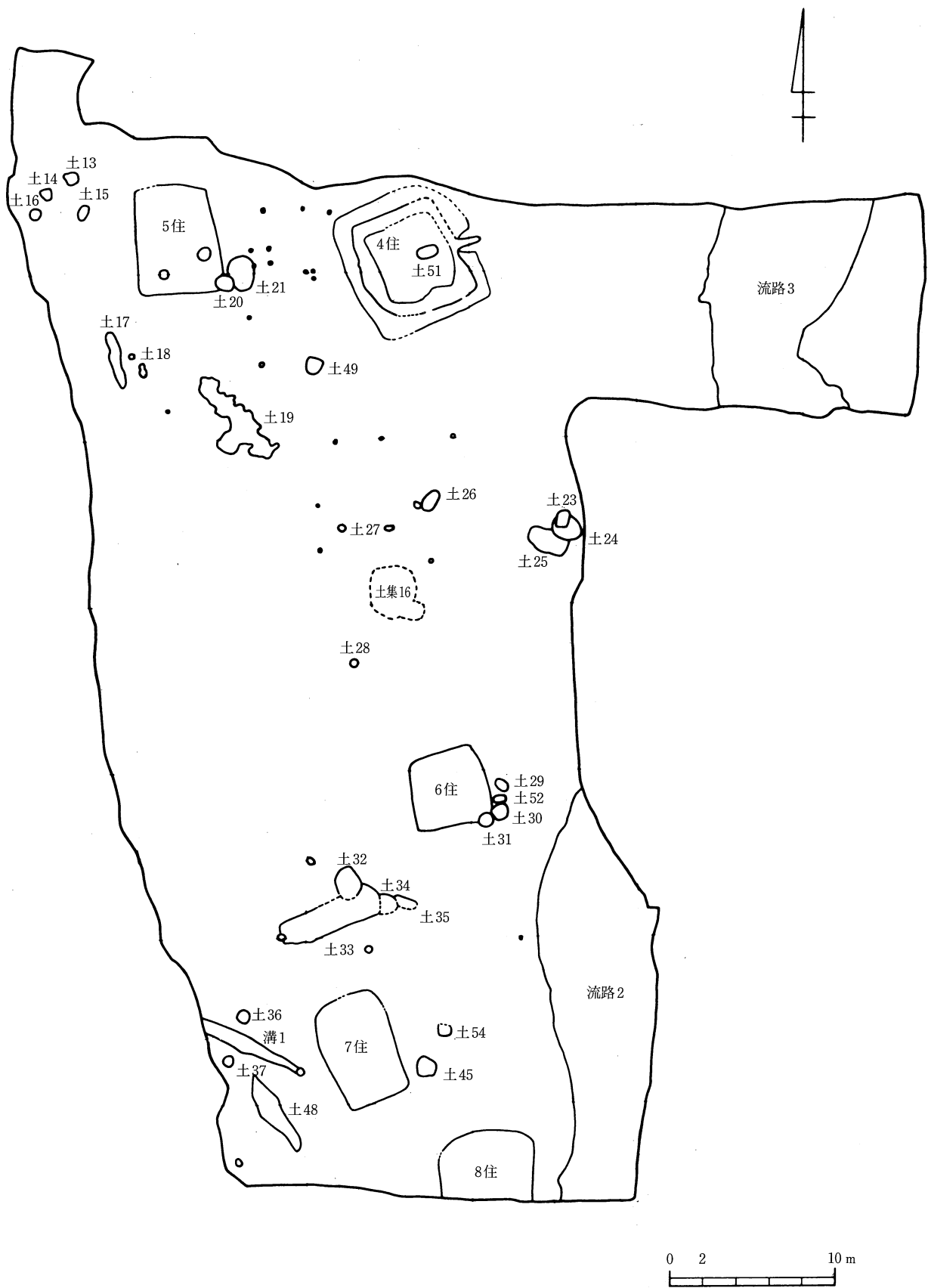
第3図 調査地の位置と周辺遺跡



第4図 調査位置図



第5図 調査範囲図



第6図 遺構配置図

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1 調査地

高宮遺跡の今回の調査地は、松本市高宮東1番に所在する。当遺跡においては、平成5年に本格的な発掘調査（第1次調査）が行われ、長野県下最大級の水辺にかかわる祭祀と推定できる遺構が検出されている。この1次調査地点より、東250m先の工場跡地が今回の第2次調査地にあたり、そのうち建物が建築される範囲に限定し調査を行った。調査面積は2060㎡である。

2 調査方法

調査にあたっては、まず、大型重機・パワーシャベルを使用して碎石による整地土とその下の耕作土および基盤土の一部を除去した。その深さは現表土面からおよそ0.5mである。引き続き、遺構検出作業を人力で行い、存在が確認できた遺構から掘り下げた。覆土中に散在する小破片の遺物は層位ごとに取り上げ、まとまった遺物は測量図に平面位置を記録して取り上げた。また、測量にあたっては調査区の北に基準点を設け高低を測るとともに、東西南北を基準に3m方眼を設定してオフセット測量をする方法を用いた。調査終了後、基準点の標高測量を行った。尚、遺構番号は第1次調査からの続き番号を使用している。

3 遺構

竪穴式住居址5軒、流路2条、溝1条、土坑・ピット95基、土器集中区1か所を検出した。時期は、住居址、及びその他ほとんどが古墳時代中期と推定され、流路は弥生時代まで遡る可能性がある。

これらの遺構の中で注目すべきは、土器集中区と流路であろう。土器集中区は掘り込みを確認できないため、住居址とも土坑・ピットとも断定できないが、3メートル四方内にいくつかの土器が置かれたごとき状態で出土。また、その周りに多量の土器片も散乱していた。1次調査で発見された祭祀遺構と状況は異なるが、何かの祭りをした可能性もある。

流路は、幅およそ6m、検出面からの深さおよそ1mと規模の大きな遺構であり、水流の跡も認められる。下層からは弥生時代の土器片が、中・上層からは古墳時代の土器片が出土。長い期間に亘って、この地に存在していたことを窺わせる。

4 遺物

土器、石器・石製品、ガラス製品が出土した。土器は古墳時代中期の土師器と須恵器片を中心に、若干の弥生土器片をあわせて整理用コンテナ箱12箱。石器・石製品は有孔砥石・有孔円盤・白玉と礫石錘、剥片や敲打痕を有する石材など、ガラス製品は小玉で、あわせて整理用コンテナ箱2箱。遺物の時期は、上述のとおり土器のほとんどが、古墳時代中期と考えられることより、他の石器などもこの時期に属する遺物であろう。尚、遺物として注目すべきは、ほとんどの住居址、溝、僅かの土坑、ピットから出土した88個の白玉・小玉である。上記の祭祀遺構的な土器集中区との関連性を窺わせる資料である。

第2節 遺構

1 竪穴住居址

① 第4号住居址 (図版1)

調査区北部に位置していた。ピット60・61・62を切り、ピット30・31・34、土55・51に切られ、北西隅と南端の一部に攪乱を受けていた。規模は長軸8.2 m、短軸7.8m。検出面からの深さは10cm。床面積は59 m²。主軸方向はN-70°-E。平面形状は隅丸方形であった。壁は、ほぼ垂直に掘りこまれており、床面は鉄分を含む暗褐色土の硬質な面に貼り床をしており、その一部が遺存している。覆土は暗灰色・灰色・黒褐色土の3層。床面にも焼土・炭化物が散乱していた。また、床面にはピットを8基確認。そのうち2基は、カマドの手前に掘り込まれており、焼土・炭化物が多量に混入。カマドの焼土を捨てた穴の可能性がある。また、3基のピットは柱穴であった。床面からの深さは30cmから40cm。柱痕と思われる層と炭化物を覆土中に確認した。

カマドの遺存状態は良好。中央部からは甕がつぶれた状態で出土し、焚き口部からは焼土・炭化物が多量に認められた。また、煙道も140cm程遺存し、壁面は激しく被熱していた。

土師器の甕・小形甕・杯・高杯のそれぞれの破片が床面に、また、礫石錘がまとまった状態で北壁際から出土した。さらに、覆土中から小玉・白玉、計19個を採集。炭化物片も多量にまとまって出土した。遺物は土器13点(うち6点は掘り方出土)を図化提示。出土遺物から推測して時期は古墳時代中期であろう。

尚、床面調査終了段階で、遺構検出の時点で想定した壁面に入り込んだ状態で遺物を確認した。そのため本址よりも古い時代の遺構重複を予測して掘り下げを行った。その結果、本址を取り巻くように掘られた溝状の遺構を検出。灰色の砂が多量に入り込んでいた。プランは当初に想定した本址の壁外にまで広がっていたが、外縁が本址プランと平行に掘り込まれ、カマド下の掘り込みが上部とほぼ同位置に掘り込まれていたこと、底が平坦でなく凹凸があること、土師器の杯・甕の破片等の出土した遺物の時期が本址と同時期であったことから本址掘り込み時の掘り方であろうと推測し、最終的に本址のプランを変更した。

② 第5号住居址 (図版2)

調査区北部に位置し、土20・ピット58・59に切られている。規模は長軸6.56 m、短軸5.00 m。床面積は28.1 m²を測る。主軸方向はN-90°-W。検出面からの深さは14cm、平面形状は隅丸長方形。壁は緩やかに掘り込まれている。床面は、はっきり確認できないため、遺物が多量に出土し、鉄分が多量に沈殿した硬質な灰色の面を床として捉えた。覆土は暗灰色土。掘り込まれたピット1基は、カマドの右脇に位置しており、土器片と多量の焼土を含んでいた。

カマドは遺存状態が悪く、はっきりと確認できないが、床面に多量の焼土が残る部分を火床部と仮定し、それを囲む硬質な盛り上がりを袖部分と推定した。カマドの火床部とその周りには、多量の土器が、またカマドの周りにも炭化物が多量に散乱していた。カマドの脇には土坑・ピットが掘り込まれており、多量の土器片と焼土も混入していた。

出土遺物はカマドの周りに集中しており、土師器の甕・高杯・杯の破片が出土。そのうち11点を図化した。さらに床面直上からは有孔砥石(図版13-8)が採集された。覆土中からは白玉が9個出土した。出土遺物より推測して時期は古墳時代中期であろう。

③ 第6号住居址 (図版2)

調査区の東部に位置し、土坑30・31に切られている。検出面から5~6cm程緩やかに掘り込まれた壁は北側と西側、南側の一部のみが遺存し、東側の壁は検出面とほぼ同レベル、壁の掘り込みは確認できない。長軸は4.68 m、短軸は4.2 m。床面積は18.8 m²。主軸方向はN-110°-Wであった。平面形は隅丸方形。床面

の遺存状態は良好。一部攪乱を受けている。青灰色土中に鉄分が多量に沈殿した硬質な面を床面として捉えた。床に掘り込まれたピットは5基、そのうちの4基は床面からの深さは8～10cmを測り、位置・深さから考えて柱穴と推測した。他の1基は、床面からの深さが浅く、緩やかに掘り込まれている。焼土が多量に混入しており、炉址の可能性もある。しかし、その一方で土坑52内からは、僅かな焼土と袖石と思われる石が出土しており、位置から考えてカマドとなる可能性がある。

出土遺物は住居址の西側に土師器の甕や高杯片が散乱していた。そのうち5点を図化した。また、遺物の中には焼土も混入していた。覆土中に含まれた白玉は26個を数える。石器は砥石が2点、有孔円盤状のものが1点出土している（図版13 - 11～13）。本址の時期は土器より推定して古墳時代中期であろう。

④ 第7号住居址（図版3）

調査区の南側に位置し、暗渠とピット52・63に切られる。規模は長軸6.2m、短軸4.5m。床面積は26.8㎡。主軸方向はN-20°-W。床面は明確に確認できない。遺物が多量に出土した面を床面として捉えた。鉄分が多量に沈殿した灰色の硬質面である。壁の遺存状態も悪い。検出面から4～7cm程掘り込まれた壁が東側に僅かに残るのみである。そのため、住居址と考えるのは難しかったが、他所に比べて土器が集中的に多量に出土したことより、土坑群と考えるよりは、住居址として考えたほうが妥当であろう。

床面に掘り込まれたピットは11基と多い。住居址内に点々と掘り込まれ、その幾つかからは、焼土が多量に確認された。覆土は黒褐色土。カマドは認められない。

出土遺物は土器片が多量に出土している。また、土器と共に覆土に混入していた礫は、何れも脆く被熱を受けた可能性がある。遺物の種別は、土師器の甕・高杯・鉢・甕・短頸壺、およびミニチュアの土製品片1点である。土器は18点を図化できた。さらに、白玉が11個確認されている。時期は、遺物から推測して古墳時代中期であろう。

⑤ 第8号住居址（図版1）

調査区南東隅に位置しており、調査区外南側に延び、一部は暗渠にも切られている。そのため、調査できた規模は、長軸5.6m、短軸1.5m、床面積は22.1㎡、住居址の半分程であろうか。壁の遺存状態も悪く、検出面から僅か1～2cm程しか確認できない。そのため遺物が出土した範囲を住居址と推測した。床面も僅かな硬質として捉えた。

掘り込まれたピットは1基、焼土が僅かにみとめられており炉となる可能性もある。

出土遺物は土師器の甕・壺・杯・鉢の破片が床面に僅かに散乱していた。6点を図示している。

2 土坑・ピット（図版4・5）

今回の調査では、32基の土坑、49基のピットが確認された。時期の推定できる遺構は少ない。分布状態は、調査区内の北西隅、第4号・5号住居址の間、東隅、中央部にある程度まとまって検出した。形は全体的にみると、円形・皿形・台形・楕円形で不整形の遺構も多い。いずれも規模は一定せず、深さも浅い遺構が多い。全容は一覧表に譲り、各まとまりごと特徴的な遺構に限って記す。

① 調査区北西隅の土坑群

土坑13・14・15・16。平面形状は楕円・円形、断面形状は皿形を呈す。検出面からの深さは10～12cm、規模は長軸80～100cm。覆土は灰色・暗灰色土。出土遺物は少ない。

② 調査区北部の土坑・ピット群

ピット20基。第4号・5号住居址の間に集中的に出土。検出面からの深さは10～20cm。覆土は暗灰色土。出土遺物は少ない。

③ 調査区東隅の土坑

土坑23・24・25。土坑25は土坑24に、土坑24は土坑23に、それぞれ切られている。検出面からの深さは2～10cmと浅い。断面形状は皿形。覆土は黄色土微粒を含む灰色土。土坑25の底部に土器片がまとまって出土していた。

④ 調査区中央の土坑・ピット群

第6号住居址の東側に位置する。土坑29・30・31・52。平面形状は楕円形。断面は皿形。第6号住居址の附属施設の可能性もある。断面形状は皿形。覆土は鉄分を含む砂層の暗灰色土。土坑29からは焼土塊と炭化物が混入していた。土坑30からは土器片が多量に出土。土坑52からは多量の焼土が出土した。出土土器は土坑30・31でそれぞれ2点を図化している。

⑤ 調査区中央の土坑・ピット群

土坑32・33・34・35、ピット49で構成される。4基の土坑は切り合っており、中央部を礫で壊されている。土坑33と土坑32からは多量の土器が出土。覆土は灰色。焼土も僅かに混入している。出土遺物には土師器の高杯・壺・甕・甑がある。土坑32出土品7点、土坑33は4点を図化している。また、土坑32から研磨痕および敲打痕のある石器が1点出土している。

⑥ その他の土坑・ピット

土坑19 調査区北西部に位置する。覆土は鉄分を含む砂層、灰色である。検出面より、ゆるやかに落ち込んでおり、底部も一定しない。人工的に掘られた壁面の掘り込みもみとめられず、溝の残骸になる可能性が高い。出土遺物はない。

土坑51 第4号住居址内に位置している。平面形状は楕円形。断面形状は、皿型である。4号住居址の2個のピットに切られている。検出面からの深さは10cm。暗褐色土層である。底部はほぼ一定。内部からは土師器が出土し、1点を図化できた。

3 溝・流路

今回は、流水の痕が認められた掘り込みを流路、水流の跡が認められない掘り込みを溝として扱った。流路は2条、溝は1条確認した。

① 流路2 (図版6)

調査区の南東隅に位置し、規模が大きく、調査区外に延びている。調査区内において確認できた範囲は長さ20m、最大幅は4.5mを測る。流れの方向は南(高)―北(低)の方向を示している。断面形や底の形態も一定していないことから自然流路であろう。南側は、緩やかに掘り込まれており、検出面からの深さは浅く、20～30cm。断面形はかなり削り込まれて明瞭ではないが逆台形を呈していたものと推測する。覆土は粘質の茶灰色・暗灰色・灰色土。下部には砂層・鉄分が沈殿している。一方の北側はやや急に掘り込まれており、検出面からの深さは最大80cmと深い。断面形は逆三角形。覆土は粘質の茶灰色・暗灰色・灰色土。最下層部の砂層内には鉄分が沈殿しており、水の流れがあったことが認められる。調査できた範囲では、平面形はほぼ直線に南から北へ延び、北側において北東に向きを変え調査区外へ続いていく。位置的に考えて、下記の流路3につながる可能性もある。

出土遺物は多量の土器片と9点の石器・剥片で、土器は主体となる土師器に少量の須恵器と弥生土器が混じる状況であった。出土位置は溝の北側に集中しており、遺物が出土した高さも上部から下部までさまざまである。出土した土器の時期は、弥生時代後期前半と終末、および古墳時代中期である。時代に幅があるため、長い期間この流路が存在し、空白期や増水を繰り返しながら遺物の廃棄が行われたことを窺わせる。図化提示できた遺物は土器25点(須恵器1点、弥生土器4点を含む)、石器2点(砥石)である。

② 流路3

調査区の北東隅に位置する。調査が出来た範囲は調査区の東際から15m。全体に砂礫が広がっている。鉄分が混入した砂礫混じりのきれいな灰色の覆土であり、方向から考えて、上記の如く流路2の続きになる可能性が高いと考えている。土師器の壺・杯・高杯の破片が僅かに混入している。図化できた遺物は、土師器4点である。

③ 溝1 (図版5)

断面上に砂層を認めることができないことから水の流れは想定していない。調査区南西隅に位置する。ピット57に切られている。検出面からの深さは10cmと浅く、東と西の高低差はあまりなく、ほぼ一定している。断面は船底型を呈す。覆土は、暗灰色土層の単層。プランも一定していることから、人工的に掘られた遺構であろう。出土遺物はなし。時期は不明である。

4 土器集中区 (図版5)

土器集中区16 調査区ほぼ中央に位置していた。南北3m、東西3m程の範囲から、原形を復元できる形で土師器数個体が出土。その周りに多量の土器片が散乱していた。調査の初期は、まとまった形の土器のまわりに土坑の存在を想定して検出を進めたが、壁面に土器片がめり込んでおり、さらに掘り広げた結果、散乱した多量の土器片を発見した。また、土器片の間には炭化物片も多量に混じっていた。明瞭な掘り込みも確認できず、当初想定していた土坑やピットではなく、土器集中区として扱った。したがって当初に想定した土坑53と土坑56は欠番となっている。

遺物の出土状況は、甕・杯・短頸壺・甔等の土師器が南西部に整然と並べられたように集められており、その周囲や本址東側から北東部にかけて掌大の土師器片が、多量に散乱していた。南西部のまとまった土器は直線的に並ぶ状況で、出土したレベルも検出面とほぼ同じである。これは土器を無造作に廃棄したと考えられるより、配置に何らかの意図を考えるのが妥当であろう。1次調査で検出された土器集中区と性格は異なるかもしれないが、祭祀的な用途の可能性も窺わせる資料であろう。図化提示できた土器は土師器が12点である。土器の時期は古墳時代中期で、他の住居址、土坑などと同時期を示す。

第1表 住居址一覧表

No.	平面図	規 模		主軸方向	カマド位置	備 考
		長軸×短軸×深さ(cm)	床面積(m ²)			
4	隅丸方形	820×780×10	(59.0)	N-70°-E	東壁	煙道140cm。P60・61・62を切る。P30・31・34、土55に切られる。攪乱にあう。
5	隅丸長方形	656×500×14	28.1	N-90°-W	西壁	P58・59、土20に切られる。攪乱にあう。
6	隅丸方形	468×452×8	18.8	N-110°-W		土30・31に切られる。攪乱にあう。
7	隅丸長方形	628×452×10	(26.8)	N-20°-W		暗渠、P52・63に切られる。
8	不明	560×105×12	<22.1>	不明		暗渠に切られる。区域外にかかる。

第2表 土坑一覧表

No.	位置(座標)		平面図	断面形	平面規模(cm)	深(cm)	備 考
13	北西	N25,W22	不整楕円形	皿形	88×84	10	
14	"	N24,W23	三角形	"	76×72	12	
15	"	N23,W21	楕円形	二段底	102×60	24	
16	"	N23,W24	円形	皿形	70×70	10	
17	"	N14,W19	不整長方形	"	342×68	10	
18	"	N13,W18	不整楕円形	"	84×42	8	
19	"	N10,W12	不整形	楕円形	624×288	16	
20	"	N18,W13	円形	皿形	112×92	8	5住、土21を切る。
21	"	N19,W12	楕円形	"	204×164	6	P56、土20に切られる。
22							欠番
23	中央東	N4,E7	長方形	二段底	84×72	16	土24を切る。
24	"	N3,E8	楕円形	皿形	180×148	4	土25を切る。土23に切られる。
25	"	N2,E7	長方形	"	248×148	6	土24に切られる。
26	中央	N5,W1	楕円形	台形	128×84	18	
27	"	N3,W6	円形	"	46×40	16	
28	"	S3,W5	"	"	48×46	8	
29	中央南	S12,E4	楕円形	"	88×60	12	
30	"	S14,E3	円形	皿形	98×92	10	6住を切る。
31	"	S14,E3	"	"	92×92	6	6住を切る。
32	南西	S18,W6	楕円形	"	<176>×156	6	
33	"	S22,W7	長方形	台形	644×168	22	土34を切る。P49、土32、試掘トレンチに切られる。
34	"	S19,W3	不明	皿形	<100>×<32>	8	土35を切る。土33、礫に切られる。
35	"	S19,W2	"	"	<128>×<32>	10	土34、礫に切られる。
36	"	S26,W12	円形	"	82×76	3	
37	"	S28,W13	"	"	68×62	4	
38							欠番
39							"
40							"
41							"
42							"
43							"
44							"
45	南西	S29,W1	円形	台形	122×120	10	
46							欠番
47							"
48	南西	S31,W11	不整形	皿形	530×128	14	暗渠に切られる。
49	北西	N13,W7	三角形	楕円形	102×92	10	
50							溝1に変更
51	中央北	N20,W1	楕円形	不定形	124×74	22	
52	中央南	S13,E3	"	皿形	76×42	4	
53	中央	S2,W2	長方形	楕円形	160×112	20	土56を切る。
54	南西	S27,EW0	不明	"	80×<60>	36	暗渠に切られる。
55							4住掘り方に変更
56	中央	NS0,W3	楕円形	皿形	322×280	6	土53に切られる。
57							4住掘り方に変更
58							"

第3節 遺物

1 土器（図版7～12、第8表）

(1) 弥生時代の土器

流路2の下部堆積層や古墳時代の遺構に混入した状況で、少量が出土している。図化提示できたのは99～101・131および90の5点にすぎない。

99～101・131は甕の胴部・口縁部で、いずれも櫛描波状紋が施紋されている。頸部のくびれが弱く、櫛描波状紋の施紋があまり密ではない点から、弥生時代後期前半に属する資料と考えたい。

90の壺は流路2の下層および周辺の検出面からの出土品が接合したもので、やや下膨れの丸い胴部、頸部から大きく屈曲して開く口縁部、面を作って垂れ下がる口縁端部と3本4単位の棒状浮紋など、各部位の形態に大きな特徴のある土器である。紋様は胴部上半に櫛描横線を上下それぞれ2段ずつ巡らし、その間に篋描山形紋を配している。時期的には弥生時代末とするよりはむしろ古墳時代前期のものと推定するが、今回調査で出土した他の古墳時代の土器がすべて古墳時代中期に属するものなので、それらとは分離するために弥生時代の項で扱った。

他に流路2出土の98の小形甕は無紋であるが、形態や内面にミガキが認められることから、弥生土器の甕の可能性もある。99～101・131などに伴うのであろうか。

(2) 古墳時代の土器

竪穴住居址を中心とする各遺構から多量に出土した。総量は整理用コンテナ11箱に及び、図化提示できたものは131点である。いずれも古墳時代中期、西暦5世紀代に属する土器と推定する。

① 種別、器種・器形

種別には土師器と須恵器がある。量的には土師器がほとんどを占め、須恵器は数片を数えるにすぎない。器種では、土師器に杯、高杯、鉢、小形壺、壺、甕、小形甕、甑、ミニチュアがあり、須恵器には杯蓋、高杯、甕が存在する。

土師器杯 丸底をもつ体部から口縁が短く外反・外開する外形を呈す杯A、口縁端部が外反せずに収まる杯B、口縁部が「く」の字に括れる頸部から外開する杯Cの3器形がみられる。杯Aには30・31・78・102・106・107・121・132、杯Bには1・14・15・32・108・119・120、杯Cには8・133が該当する。杯Bに属するものの中で14・15・120は、口縁端部内面に傾斜面を有す。他に、9は口縁が直立し、須恵器杯蓋を反転させて模した杯Dに似る。33・34・49・79・118は口径に対して身が深いため鉢として分離することもできるが、今回は口縁部形態からのみみて杯A、杯Cに含める。

土師器高杯 4段成形で屈折脚高杯と称される高杯A、杯部や脚部に稜を有する高杯B、2段成形の杯部に円錐形の脚部が組み合わさる高杯Cの3器形がみられる。全形を知り得るものは少ないが、高杯Aには16・18・19・20・35・38・73・80・85・125、高杯Bには103、高杯Cには39・65・84・104・123が該当する。ただし、杯部のみの残存により高杯A・Bの判別がつかないものも多い。この他、36は杯Aに円錐脚を付した高杯Dの杯部の可能性がある。

土師器小形壺 埴、直口壺、小型丸底壺、短頸壺などの各器種がみられる。いずれも数は少なく、全形を知り得るものはない。埴は丸底でやや扁平の球形を呈する胴部に、小さく締まってくびれた頸部から直線的またはやや内湾して開く口縁部が付される特徴的な形態をもつ。74・126の胴部破片が該当しよう。直口壺は丸底で球形の胴部から直線的に口縁部が開く形態を呈す。109が該当する。小型丸底壺も直口壺と同形態だが規格がひとまわり小さい。50の1点のみが該当する。短頸壺は40の1点のみが該当する。

土師器壺 二重口縁をもつ壺Aと単純口縁の壺Bの2器形がある。ただし、壺Aには非常に微妙な程度の稜で二重口縁を形成しているものもあり、壺Bとの区分が難しい。全形が把握できるものは少ない。壺Aには63・88・105が該当する。壺Bには60・61・62・69・87・114が該当する。いずれも外器面の調整にミガキが多用されている。

土師器甕 胴部最大径に対して頸部径が壺より大きく、器面調整にミガキが行われることが少ない。全形を知る個体が少なく器形の比較は難しいが、胴部がかなり球形のもの（甕A）と、胴部の球形がやや縦長になったもの（甕C）の2器形が認められる。甕Aには7・53が該当し、甕Bには、5・27・28・47・76が該当するが、他の甕は胴部を欠くものが多く区別できない。

土師器小形甕 甕の小形のもので、3・10・11・41・94・95・96・97・98・127を該当させたい。丸底で胴部が球形なもの、平底でやや角張る胴部のものの2器形に分類できそうである。

土師器甌 台形や三角形を逆にしたような鉢形の形態を採る小形甌と、深鉢形の大形甌がある。小形甌には57・66・110・111が該当し、大形甌には29・55・113が該当する。

須恵器 4点を図示している。86が高杯、130は甕の口縁頸部で、他は、56は甌の口縁部破片、77は杯蓋の口縁端部破片と推定する。高杯の杯部と甌の口縁部には波状紋の施紋が認められる。

② 調整、黒色処理など

器種により使われる器面調整の手法に偏りがある。ミガキ調整は杯、高杯、小形壺の小形器種と大形甌、壺で頻繁に行われる一方、甕、小形甕、小形甌では稀となっている。甕、壺などではハケメ調整に代わって条線を伴わない板状工具などによるナデ調整が多く用いられている。

内面黒色技法が施された個体は杯（1）、高杯（37）および短頸壺（40）に1点ずつ認められるのみである。いずれも内面黒色部分の器面調整にミガキを用いていない。同技法が普遍化する以前のものであろう。また、器面に赤色顔料を塗られていたと認められる個体が高杯に1点ある（20）。

③ 土器群

今回の調査で古墳時代中期の土器は遺構毎にかなりまとまった出土状態を示した。そのなかでも、遺構の状況が良好な形で把握できた第4号・第5号住居址、土坑32・33、および土器集中区16からの出土品は、廃棄の同時性が高い良好な土器群と考える。その他の住居址出土資料についても土器群としてまとめて捉えてもよいであろう。また、流路2上層の出土品の多くは出土地点が北部の西側に集中しており、自然流路などへの長期にわたる廃棄とは異なる状況が想定される。これらについても良好な土器群として扱いたい。

これら土器群の編年的な位置は、概略で見ると古墳時代中期に属することは異論はないであろう。細かくみると、器種組成の面からは、古墳時代前期的な器種（小型丸底鉢、小型器台など）がまったくない、杯が一定量存在、小型丸底壺がほとんどない、高杯はAとCが主体、などの特徴が各土器群で指摘できる。技術的には、内面黒色技法は認められるが普遍化していない。これらを総合すると、各土器群は出川西遺跡6次調査の報告（松本市教育委員会1999『松本市出川西遺跡Ⅵ緊急発掘調査報告書』）で提示した松本盆地における古墳時代中期土器編年表（案）の1～6段階区分の第4段階に相当すると考える。年代的には第1段階が4世紀後半～末、第6段階が5世紀末～6世紀初頭として捉えているので、第4段階は5世紀後半に位置付けられる。

2 石器（図版13、第4～6表）

① はじめに

高宮遺跡第2次調査では総点数29点、総重量約6469.0gを計る石器が出土した（註1）。石器の出土した遺構としては、第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址、第7号住居址、土坑32、流路2がある。これらは伴出した土器から、流路2下層が弥生時代後期～終末期、その他は古墳時代中期に帰属するものと推定されている。図化提示は砥石状石器を中心に7点を対象とした。他に高宮Ⅱ石器群全体としての器種単位石材組成

と遺構・石材単位器種組成を、それぞれ第5表・第6表に示す。

② 石器群概観^(註2)

ここでは遺構より出土したそれぞれの石器群を概観してみたい。

第4号住居址石器群 千枚岩製剥片2点、結晶片岩製剥片3点、千枚岩製礫石器Ⅱ類1点より構成される。このほかに礫石錘が23点出土しており、礫石器類や砥石状石器も若干含まれている。千枚岩製の剥片は高宮Ⅱ石器群において唯一の同一母岩関係を有するものである。礫石錘の計測値は第3表に示す。

第5号住居址石器群 礫質砂岩製礫石器複合1点、凝灰質砂岩製砥石状石器1点(図版13-8)より構成される。共に単独資料である。

第6号住居址石器群 砂岩製礫石器Ⅰ類、粘板岩製砥石状石器(図版13-13)、泥質凝灰岩製砥石状石器(同-11)、粘板岩製有孔石製品(同-12)各1点より構成される。すべて単独資料である。13は背腹両面の対応する位置に直径約0.5~1mmの穿孔痕が認められるが、それぞれ最大深約0.5~2mmで止まっており、貫通してはいない。

第7号住居址石器群 千枚岩製礫石器複合1点のみより構成される。細長い扁平礫を素材とし、端部には敲打痕が、平坦部には研磨痕が認められる。単独資料である。

土坑32石器群 輝緑凝灰岩製礫石器複合1点のみより構成される。細長い棒状礫を素材とし、端部及び平端面には敲打痕が、平坦面には研磨痕が認められる。単独資料である。

流路2石器群 珪岩製石核、砂岩製剥片、礫質砂岩製礫石器Ⅰ類、千枚岩製礫石器複合、砂岩製礫石器複合、凝灰岩製砥石状石器(図版13-23)、礫質砂岩製砥石状石器(同-20)、チャート礫、砂岩製礫片各1点より構成される。20は背腹両面の平端面に著しい研磨面が認められるが、それらを切る通常剥離痕や敲打痕が認められる。23は右側面には折れ面に近い剥離痕が認められる。礫面の残る背面にはわずかに研磨痕が認められる程度であるが、両側面及び腹面には金属器を研いだものであろうか、明瞭な単位が認められる。すべて単独資料である。

③ 小結

全体的傾向として礫をそのまま素材として用いる石器が多いと考えられるため、母岩識別率は高いものの単独資料が多く、接合関係は確認し得なかった。住居址単位石器群の比較からは、石器が全く出土していない第8号住居址を除いては、高宮遺跡Ⅱにおいては砥石状石器か、もしくはそれに準ずる機能が想定される礫石器複合を、住居址単位においてそれぞれ数点ずつ保有していた可能性を指摘し得る。

<補註>

註1 ここでは白玉を除く石器を対象としている。また、第4号住居址において23点が出土した礫石錘も、ここでは区別して扱っている。しかし調査段階で礫石錘と認定された資料の中にも一部ではあるが、明確な人為的加工痕を有する狭義の石器が含まれているようである。

註2 明確な遺構より出土した一群の石器を遺構単位石器群と呼称し、資料操作の基本的単位とした。なお、本稿で用いた石器の呼称は拙稿(太田 1998)に準拠している。礫石器の類型はⅠ類：凸面敲打、Ⅱ類：凸面研磨、Ⅲ類：凹面敲打、複合：Ⅰ~Ⅲの2種以上としている。なお、遺構に伴わないものとして、グリットで取り上げたものや検出面、排土より得られた資料群がある。

<引用・参考文献>

太田圭都 1998 「◎石器・石製品」『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会

3 玉類(第7表)

竪穴住居址、土坑および流路2から白玉とガラス小玉が出土している。点数は白玉80点、ガラス小玉8点の計88点だが、うち13点は破損品である。玉類の出土地点および計測値一覧は第7表に示す。

白玉は扁平な円筒形の形態を呈し、円筒の中央に貫通孔が開けられている。大きさは直径3.50～6.30mm、厚さ1.30～4.40mm、孔径1.00～2.10mm、重量は0.03～0.24gの範囲にあり、平均値で直径4.81mm、厚さ2.74mm、孔径1.58mm、重量0.10gを示す。材質はすべて低品位の滑石系統の石材が用いられており、色調は暗灰色から黄灰色を呈す。円筒の上下面に貫通孔を中心に放射状の線刻がなされているものが1点ある。

ガラス小玉は球を扁平にした形態で、中央に貫通孔を有す。大きさは直径3.10～6.95mm、厚さ2.30～5.10mm、孔径0.70～2.20mm、重量は0.04～0.37gの範囲にある。しかし、細かく見ると直径3.10mm、厚さ2.30mm前後の小さいものと、直径6mm、厚さ3.4mmを超える大きいものの2種類に分かれるものと推定される。材質はコバルトガラスと酸化銅系のガラスの2者があり、色調は前者が濃紺から紺青色、後者が青緑から浅葱色（ターコイズブルー）を呈す。

白玉とガラス小玉の出土状況は、遺構覆土に点々と混じっており、1か所にまとまって遺存している状況は認められなかった。そのため、玉類の大半は遺構掘り下げ時に発見することができず、覆土をすべて水洗するなかで確認したものである。

4 その他の遺物

土製品として土器のミニチュア、紡錘車がある。ミニチュアは手捏ねで、第7号住居址（図版12 - 135）と土坑54（同 - 136）から各1点が出土した。136は全形が判り、中膨れの円筒形をしているが、甕を模したものとする。135は口縁部を欠くが、136と同様の形態を採ると推定する。土製紡錘車（図版12 - 137）は検出面出土で遺構に属さない。扁平な形態の型で、直径4.3cm、厚さ0.7cm、孔径0.6cmを測る。

第3表 第4号住居址 礫石錘計測表

No.	出土地点・No.		礫形状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	4住	No12	棒状	9.55	5.81	3.67	296	折れ面あり (PT)
2	4住	No12	扁平	9.23	7.99	2.84	274	
3	4住	No12	棒状	20.66	5.64	4.77	894	敲打痕あり (PI)
4	4住	No19	棒状	7.82	3.71	2.87	106	敲打痕あり (PI)
5	4住	No19	不整形	8.00	3.86	2.29	90	
6	4住	No19	不整形	8.43	5.05	2.10	104	
7	4住	No19	棒状	8.68	3.97	2.18	98	敲打痕あり
8	4住	No19	不明	11.13	3.31	2.48	90	剥片 (F)
9	4住	No19	棒状	14.00	4.16	2.43	206	著しい研磨・敲打痕あり (Ws)
10	4住	No20	不整形	9.10	4.18	1.87	58	11と剥落面で接合 (PT)
11	4住	No20	不整形	13.96	6.12	3.72	266	10と剥落面で接合 (PT)
12	4住	No20	棒状	13.46	5.20	2.78	248	
13	4住	No20	棒状	11.91	5.16	3.33	314	折れ面あり (PT)
14	4住	No20	棒状	13.47	4.60	4.03	320	
15	4住	No20	棒状	13.81	5.64	3.87	396	
16	4住	No20	扁平	11.90	6.06	3.90	390	
17	4住	No21	棒状	12.15	2.89	3.18	154	
18	4住	No21	棒状	15.87	5.75	5.30	586	
19	4住	No21	棒状	16.81	5.70	5.00	632	
20	4住	No21	棒状	19.77	6.85	3.69	620	
21	4住	No21	棒状	18.02	6.73	3.81	546	敲打痕あり (PI)
22	4住	No21	不整形	18.00	7.35	4.93	650	
23	4住	No21	棒状	25.66	8.11	3.16	822	

第4表 高宮Ⅱ実測図掲載個体属性一覧

No.	出土遺構1	出土遺構2	器種名	素材	素材獲得技術	二次加工技術	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	礫面	石材名	母岩
8	5住	No.16	砥石状石器	不明	不明	研磨・穿孔	102.3	48.1	20.6	134.4	なし	凝灰質砂岩	単独
11	6住	覆土	砥石状石器	不明	不明	研磨・穿孔	110.0	34.0	16.4	100.5	なし	泥質凝灰岩	単独
12	6住	覆土	有孔石製品	板P	礫	研磨・穿孔	31.1	29.8	7.2	9.7	ほぼ全面	粘板岩	単独
13	6住	覆土	砥石状石器	不明	不明	両極・研磨	61.7	40.0	7.1	30.4	なし	粘板岩	単独
20	溝1	No.28	砥石状石器	不明	不明	研磨・敲打	76.7	41.7	18.5	93.5	なし	礫質砂岩	単独
23	溝1	No.71	砥石状石器	不明	不明	研磨	109.9	26.3	24.9	69.5	なし	凝灰岩	単独
26	検出面	No.28	砥石状石器	不明	不明	研磨・穿孔	43.4	80.1	6.5	24.6	なし	粘板岩	単独

第5表 高宮Ⅱ器種単位石材組成

単位：点数

器種/石材	チャート	粘板岩	凝灰岩	泥質凝灰岩	輝緑凝灰岩	千枚岩	結晶片岩	砂岩	礫質砂岩	凝灰質砂岩	珪岩	石材
		Sl	Tu	MTu	Sc	Ph	CrSc	Sa	CoSa	TSa	Qu	略号/計
石核	C	1									1	2
剥片	F					2	3	1				6
二次加工ある剥片	RF					1						1
礫石器Ⅰ類	PⅠ							2	2			4
礫石器Ⅱ類	PⅡ					1						1
礫石器複合	PC				1	2		1	1			5
砥石状石器	Ws	2	1	1					1	1		6
礫	P	1						1				2
礫片	PT							1				1
有孔石製品	Bo		1									1
器種	略号/計	2	3	1	1	6	3	6	4	1	1	29

第6表 高宮Ⅱ遺構・石材単位器種組成

単位：点数

出土遺構1	石材/器種	C	F	RF	PⅠ	PⅡ	PC	Ws	P	PT	Bo	計	器種/石材	出土遺構1
4住	Ph		2			1						3	Ph	4住
	CrSc		3									3	CrSc	
	Sa								1			1	Sa	
4住	計	0	5	0	0	1	0	0	1	0	0	7		4住 計
5住	CoSa						1					1	CoSa	5住
	TSa							1				1	TSa	
5住	計	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2		5住 計
6住	Sl							1			1	2	Sl	6住
	MTu							1				1	MTu	
	Sa				1							1	Sa	
6住	計	0	0	0	1	0	0	2	0	0	1	4		6住 計
7住	Ph						1					1	Ph	7住
7住	計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1		7住 計
土坑32	Sc						1					1	Sc	土坑32
土坑32	計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1		土坑32 計
溝1	Ch								1			1	Ch	溝1
	Tu							1				1	Tu	
	Ph						1					1	Ph	
	Sa		1				1			1		3	Sa	
	CoSa				1			1				2	CoSa	
	Qu	1										1	Qu	
溝1	計	1	1	0	1	0	2	2	1	1	0	9		溝1 計
G-3	Sa				1							1	Sa	G-3
G-3	計	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1		G-3 計
検出面	Ch	1										1	Ch	検出面
	Sl							1				1	Sl	
	Ph			1								1	Ph	
検出面	計	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	3		検出面 計
排土	CoSa				1							1	CoSa	排土
排土	計	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1		排土 計
総計		2	6	1	4	1	5	6	2	1	1	29		総計
出土遺構1	石材/器種	C	F	RF	PⅠ	PⅡ	PC	Ws	P	PT	Bo	計	器種/石材	出土遺構1

第4章 調査のまとめ

今回、調査が行われた高宮地区を含む南松本地区は、かつて、発掘調査がなかったこと等から、長い間、遺跡の解明ができずにいた地域である。しかし、昨今この地域に大型ビル建設が相次ぎ、それに伴う広範囲での発掘調査が可能となり、新たな発見が相次ぎだした。今回の調査も、これら調査の一連のものになる。

まず、南松本地区を地形的に概観すると、奈良井川と田川に挟まれた湧水地であり、扇状地や河岸段丘上ではない“沖積地的な平坦地”であり、広大な平地の中央に、僅かな微高地が存在している。そして、遺跡も、その微高地内に集中し、第2章第2節でも取り上げたが、広範囲に調査が行われ、成果のあった遺跡は、高宮遺跡Ⅰを北限に、出川西、出川南、平田北、平田本郷が挙げられよう。

これらを時代別に概観してみるに、この地区に人々が住む痕跡が初めて認められるのは、弥生時代からである。出川西遺跡からは弥生時代中期末の住居址と磨製石鏃、石包丁を採集。磨製石鏃の中には未製品も含まれており、この地において石鏃が製作されていた可能性もあり、貴重な発見であった。古墳時代では、高宮・出川南遺跡において、該期の巨大な集落址と祭祀遺構・古墳が出土した。祭祀遺構は、県下でも非常に珍しい水際の祭祀遺構であり、古墳（平田里古墳）も、松本平において埴輪が並べられた唯一の古墳であり、この地は松本平のなかでも精神文化の発達した地域であったのだろうか。平安時代では、平田北・平田本郷において、集落址が認められる。平田北遺跡は、上記の出川南・西につながる遺跡として、関連性があるが、注目すべきは、3回に亘る平田本郷遺跡の調査である。平田本郷遺跡は、1 km四方に亘る遺跡だが、北部（第1・2次調査）と南部（第3次調査）の2か所の調査を行い、北部は上記の平安時代初めまでの集落群にあてはまり、南部は、それとは違い平安時代後期の集落址であることが判明した。つまり、このことより平田本郷遺跡内に平安時代の9世紀代までと10世紀以降の開発の境界線を想定できる。つまり、北部は今回の高宮と出川南・西集落群エリアに、南部は小原遺跡・高畑遺跡の集落群エリアにあてはまり、その北部の地域の北限が、いま確認できている時点で、今回の高宮遺跡第2次調査地にあたるのであろう。ただ、残念なことに今回の高宮遺跡より北は、調査があまり行われておらず、また、成果もあまり挙がっていないことから、今後、調査が必要なところである。

このような歴史的背景を踏まえて行われた今回の調査において、最も注目すべきは、今回の調査区の西200m地点において行われた高宮遺跡Ⅰとの関連であった。調査の結果、古墳時代中期の住居址を5軒、“集落内祭祀”の可能性のある土器集中区を1か所検出。出土した土器も、ミニチュア土器など、祭祀用の遺物もあり、更に、ほとんどの住居址の覆土中から多量の玉類も出土。そもそも、この時期の遺構からは、玉類の出土は多々あることであるが、この地で行われた祭祀との関連性を窺う事ができる資料となろう。つまり、高宮1次調査地点の祭祀を担っていた人々の集落が、今回の調査地辺りまで延びていたのであろうか。その点で、前回の調査との関連性が僅かに認められたといえよう。

更に、調査区の東隅からは、1条の深い流路を検出。溝中の上部からは僅かな須恵器を伴って土師器が、下層・底部からは弥生土器の壺の破片が出土した。まず、弥生土器の壺であるが形態や紋様は在地ではなく、東海系に求められる、大変珍しいものである。そして、この発見は、高宮遺跡から東2.1km離れた弘法山古墳から出土した土器が、いずれも東海系であり、この古墳の造営集団の所在を巡る問題があるが、そうした問題を解く鍵となるであろうか。弘法山古墳の造営集団居住地がこの近くにあった可能性も窺わせる好資料の出土であり、今後の調査の成果が期待されるところである。

最後になりましたが、発掘作業に参加して頂いた皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解を頂いた(株)信州生活互助会の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献：神沢昌二郎他1993『松本市史 第四巻 旧市町村編Ⅲ』松本市

第7表 玉類計測表 (単位: mm・g)

No	地点	種類	材質	最大径	最大厚	重量	孔径	破損状況	備考
1	4住	白玉	A	4.10	2.50	0.06	1.25	完形	
2	4住	白玉	A	5.50	2.60	0.12	1.90	ほぼ完形	
3	4住	白玉	A	4.80	3.10	0.11	1.70	完形	
4	4住	白玉	A	4.70	2.90	0.10	1.50	完形	
5	4住	白玉	A	4.75	2.50	0.08	1.70	ほぼ完形	
6	4住	白玉	A	6.00	3.35	(0.07)	1.65	一部欠	鉄分付着
7	4住	白玉	A	4.40	3.00	0.05	1.00	完形	
8	4住	白玉	A	4.00	3.00	0.06	1.70	完形	
9	4住	白玉	A	4.20	1.80	0.05	1.15	完形	
10	4住	白玉	A	3.50	2.40	0.05	1.10	完形	
11	4住	白玉	A	4.25	1.50	0.03	1.90	完形	
12	4住	白玉	A	(4.75)	(1.50)	(0.04)	(1.30)	約1/2	
13	4住	小玉	B	3.10	2.30	0.04	0.90	完形	
14	4住	小玉	B	3.15	2.30	0.04	0.70	完形	まきつけ、一品作り
15	4住	白玉	A	4.70	2.40	0.05	1.45	完形	
16	4住	白玉	A	3.95	2.20	0.06	1.20	完形	
17	4住	白玉	A	3.70	1.80	0.05	1.00	完形	
18	4住	小玉	B	(2.80)	(1.90)	(0.02)	(0.70)	約1/2	
19	4住	小玉	B	(—)	(—)	(—)	(—)	小片残	
20	4住	白玉	A	4.80	3.20	0.12	1.60	完形	
21	5住	白玉	A	6.30	3.25	0.15	1.60	ほぼ完形	
22	5住	白玉	A	4.75	1.80	0.09	1.45	完形	
23	5住	白玉	A	5.10	2.50	(0.08)	1.50	一部欠	
24	5住	白玉	A	5.10	1.30	(0.05)	1.70	一部欠	
25	5住	白玉	A	5.80	2.85	(0.11)	1.70	一部欠	
26	5住	白玉	A	4.90	2.80	0.12	1.35	完形	
27	5住	白玉	A	6.15	3.10	0.17	1.70	ほぼ完形	
28	5住	白玉	A	5.85	3.20	(0.11)	1.50	一部欠	
29	5住	白玉	A	6.30	3.75	(0.18)	1.60	一部欠	
30	6住	白玉	A	5.10	2.60	(0.07)	1.70	一部欠	
31	6住	白玉	A	4.30	3.00	0.07	1.60	ほぼ完形	
32	6住	白玉	A	4.20	3.00	0.07	1.70	完形	
33	6住	白玉	A	4.25	2.10	0.03	1.60	完形?	
34	6住	白玉	A	5.10	3.60	0.16	1.75	完形	
35	6住	白玉	A	5.50	3.00	0.14	1.70	完形	
36	6住	白玉	A	5.10	3.15	0.14	2.00	完形	
37	6住	白玉	A	6.00	2.75	0.12	1.60	完形	
38	6住	白玉	A	5.40	2.60	0.12	2.00	完形	
39	6住	白玉	A	6.20	2.30	(0.12)	2.00	一部欠	
40	6住	白玉	A	5.10	2.50	0.09	2.01	完形	
41	6住	白玉	A	5.30	2.50	0.09	1.80	完形?	
42	6住	白玉	A	5.00	1.85	0.06	1.80	完形	
43	6住	白玉	A	4.40	2.80	0.09	2.00	完形	
44	6住	白玉	A	4.00	2.30	0.07	1.70	完形	
45	6住	白玉	A	4.20	2.80	0.08	1.35	完形	凸あり

A: 低品位の滑石系統、B: コナバルト系ガラス、C: 酸化銅系のガラス

No	地点	種類	材質	最大径	最大厚	重量	孔径	破損状況	備考
46	6住	白玉	A	4.15	3.50	0.09	1.45	完形	
47	6住	白玉	A	3.95	2.40	0.05	1.20	完形	
48	6住	白玉	A	(4.10)	(1.90)	(0.03)	(1.30)	約1/2	
49	6住	白玉	A	5.00	3.00	0.12	2.00	完形	
50	6住	白玉	A	5.00	3.00	0.11	2.00	完形	
51	6住	白玉	A	4.75	3.50	0.13	1.90	完形	
52	6住	白玉	A	4.10	2.40	0.06	1.80	完形	
53	6住	白玉	A	4.20	2.30	0.07	1.70	完形	
54	6住	白玉	A	4.20	2.90	0.07	1.60	完形	
55	6住	白玉	A	4.10	2.65	0.06	1.60	完形	
56	7住	白玉	A	4.50	2.90	0.08	1.90	完形	
57	7住	白玉	A	4.20	3.35	0.08	1.70	完形	
58	7住	白玉	A	6.30	3.10	0.19	1.80	完形	
59	7住	白玉	A	5.95	3.00	0.15	1.80	完形	
60	7住	白玉	A	5.70	4.40	0.19	1.85	完形	
61	7住	白玉	A	5.00	3.10	0.09	2.00	完形	
62	7住	白玉	A	4.40	3.40	0.09	1.20	完形	
63	7住	白玉	A	4.10	2.80	0.07	1.40	完形	
64	7住	白玉	A	4.15	2.60	0.07	1.40	完形	
65	7住	白玉	A	4.00	3.15	0.07	1.20	完形	
66	7住	白玉	A	4.20	1.80	0.05	1.20	完形	
67	土坑23	白玉	A	4.80	2.70	0.09	1.60	完形	
68	土坑24	白玉	A	4.70	2.90	0.07	1.45	完形	
69	土坑24	白玉	A	4.55	2.90	0.10	1.40	完形	
70	流路2	小玉	B	6.95	5.10	0.37	2.20	完形	大玉、管切断、擦り切り痕
71	流路2	白玉	A	3.80	1.60	0.05	1.35	完形	
72	流路2	小玉	C	(—)	(4.10)	(0.08)	(—)	約1/3	
73	流路2	白玉	A	5.70	3.00	0.14	1.50	完形	
74	流路2	白玉	A	4.10	2.30	(0.06)	1.20	一部欠?	
75	流路2	小玉	C	6.25	4.60	0.23	1.70	完形	まきつけ、一品作り
76	流路2	小玉	B	6.00	3.40	(0.12)	1.50	完形	一品作り後ケズリ
77	流路2	白玉	A	5.70	3.65	0.16	1.50	完形	
78	流路2	白玉	A	4.10	2.50	0.06	1.60	完形	
79	流路2	白玉	A	4.10	3.20	0.11	1.20	完形	
80	流路2	白玉	A	5.60	2.30	0.10	1.65	完形?	
81	流路2	白玉	A	4.25	2.30	0.08	1.20	完形	
82	流路2	白玉	A	4.00	2.80	0.09	1.30	完形	
83	流路2	白玉	A	5.80	3.40	0.19	1.60	完形	
84	流路2	白玉	A	4.50	2.60	0.10	1.40	完形	
85	流路2	白玉	A	5.00	2.60	0.11	2.00	完形	
86	流路2	白玉	A	6.00	2.50	(0.12)	1.50	一部欠	
87	流路2	白玉	A	4.20	1.90	0.07	1.15	完形	
88	(不明)	白玉	A	5.80	3.75	0.24	1.70	完形	放射状の線刻

第8表 土器・土製品一覧表

No	地点	器種	寸法 (cm)		残存度	紋様・調整		実測番号	注記	備考
			器高	口径		外面	内面			
1	4住	杯B		(12.6)	口縁1/2 底部1/2	外面 口縁ヨコナデ、体部横～斜の工具ナデ、底部ケズリ	内面 横・斜の工具ナデ	4-4	高宮II 4住No15	内黒
2	4住	高杯		(21.4)	口縁1/4 ほぼ完	口縁ヨコナデ、杯部縦ミガキ摩滅	縦・斜ミガキ	4-3	高宮II 4住No31・床下	
3	4住	小形甕		13.2	口縁3/4	口縁ヨコナデ、胴部板ナデ摩滅	板ナデ摩滅	4-7	高宮II 4住No26	
4	4住	甕		(16.6)	口縁3/4	口縁ヨコナデ、胴部斜の板ナデ摩滅	板ナデ摩滅	4-6	高宮II 4住No26	内面の巻き上げ痕が顕著に残る
5	4住	甕		17.2	口縁一部欠	口縁ヨコナデ、胴部ナデ上半摩滅・下半ケズリ状ナデ	ナデ	4-1	高宮II 4住No31	
6	4住	甕			胴部1/6	頸部ナデ、胴上部ケズリ状の工具ナデ?、胴部ケズリ	工具ナデ・指圧痕	4-5	高宮II 4住No4	在地ではほとんど見ない灰白胎土
7	4住	甕		(18.4)	口縁3/4	口縁ヨコナデ、頸部縹痕の残るヨコナデ、胴部斜板ナデ	頸部ヨコナデ、胴部ナデ後指圧痕	4-2	高宮II 4住No23・25・27・カマド	
8	4住掘り方	杯C	6.9	(15.0)	口縁1/4 底部1/2	口縁ヨコナデ、体部ミガキ、底部ケズリ後ミガキ摩滅	横ミガキ摩滅	土58-1	高宮II 土58No2	出土地点変更
9	4住掘り方	杯D?		(15.8)	口縁1/8 底部2/3	口縁ヨコナデ、胴部・体部工具ナデ	工具ナデ後横ミガキ	土58-2	高宮II 土58フク土	出土地点変更
10	4住掘り方	小形甕	12.5	12.4	底部完	口縁ヨコナデ、胴部・底部工具ナデ(一部ケズリ状)	板ナデ	土55-2	高宮II 土55No2・4	出土地点変更
11	4住掘り方	甕		(14.9)	口縁1/3 底部1/3	口縁ヨコナデ、胴部・底部工具ナデ	工具ナデ	土58-3	高宮II 土58No6・フク土	凶上復元 出土地点変更
12	4住掘り方	甕		(17.6)	口縁一部欠	口縁・頸部ヨコナデ、胴部工具ナデ	工具ナデ	土55-1	高宮II 土55No5・6	出土地点変更
13	4住掘り方	壺		(7.6)	底部完	胴部横ミガキ摩滅、底部工具ナデ	ナデ摩滅	土55-3	高宮II 土55No1	出土地点変更
14	5住	杯B		(12.4)	口縁1/4 底部一部	口縁ヨコナデ、体部縦ミガキ摩滅、底部ヘラケズリ(一部ハケメ?)	斜ミガキ摩滅	5-2	高宮II 5住No21	
15	5住	杯B	4.4	(12.2)	口縁1/4 底部完	口縁ヨコナデ、体部ミガキ摩滅、底部ケズリ後ミガキ摩滅	ミガキ摩滅	5-1	高宮II 5住No6	
16	5住	高杯A		(12.8)	底部一部欠	胴部縦ミガキ、端部ヨコナデ	ナデ、絞り痕、胴部下調整摩滅	5-5	高宮II 5住No18	
17	5住	高杯		17.8	口縁1/3	口縁ヨコナデ、杯部縦ミガキ	縦ミガキ	5-3	高宮II 5住No9	
18	5住	高杯A			筒胴部完	脚部縦ミガキ	ナデ(一部ハケメ)、内部奥の絞り痕ナデ消し	5-4	高宮II 5住外No8	
19	5住	高杯A		(14.8)	底部一部	脚部下半縦ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	ナデ摩滅	5-8	高宮II 5住外	
20	5住	高杯A	(14.0)	(20.4)	口縁1/2	口縁ヨコナデ、杯・脚部縦ミガキ	杯部縦ミガキ、脚部工具ナデ(一部ハケメ)・ケズリ	5-6	高宮II 5住No20	杯部内外面・脚部外面わずかに赤彩痕跡
21	5住	甕		(15.8)	口縁2/3	口縁ヨコナデ、頸部ナデ	ハケメ後ナデ	5-10	高宮II 5住No9	
22	5住	甕		(16.4)	口縁3/4	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ摩滅	工具ナデ	5-7	高宮II 5住No10	全体的に厚手で雑な作り
23	5住	甕		(18.4)	口縁完	口縁ヨコナデ、頸部・胴部斜ハケメ	頸部指頭圧痕、胴部横ハケメ	5-9	高宮II 5住No2・外・フク土	厚手で雑な調整
24	5住	甕		(7.2)	底部完	胴下部縦～斜ハケメ、底部ナデ	ナデ・ハケメ	5-11	高宮II 5住No3	
25	6住	高杯		19.1	口縁7/8	口縁ヨコナデ、杯部斜ハケメ後縦ミガキ	斜ハケメ後縦ミガキ	6-1	高宮II 6住No12・15	
26	6住	甕		(15.8)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、胴部縦の工具ナデ	斜の工具ナデ	6-3	高宮II 6住No21	
27	6住	甕		(17.6)	口縁2/3 底部1/3	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ、底部ナデ(ケズリ状?)	工具ナデ	6-5	高宮II 6住No6・8・9・10・11	底部と接点なく復元実測

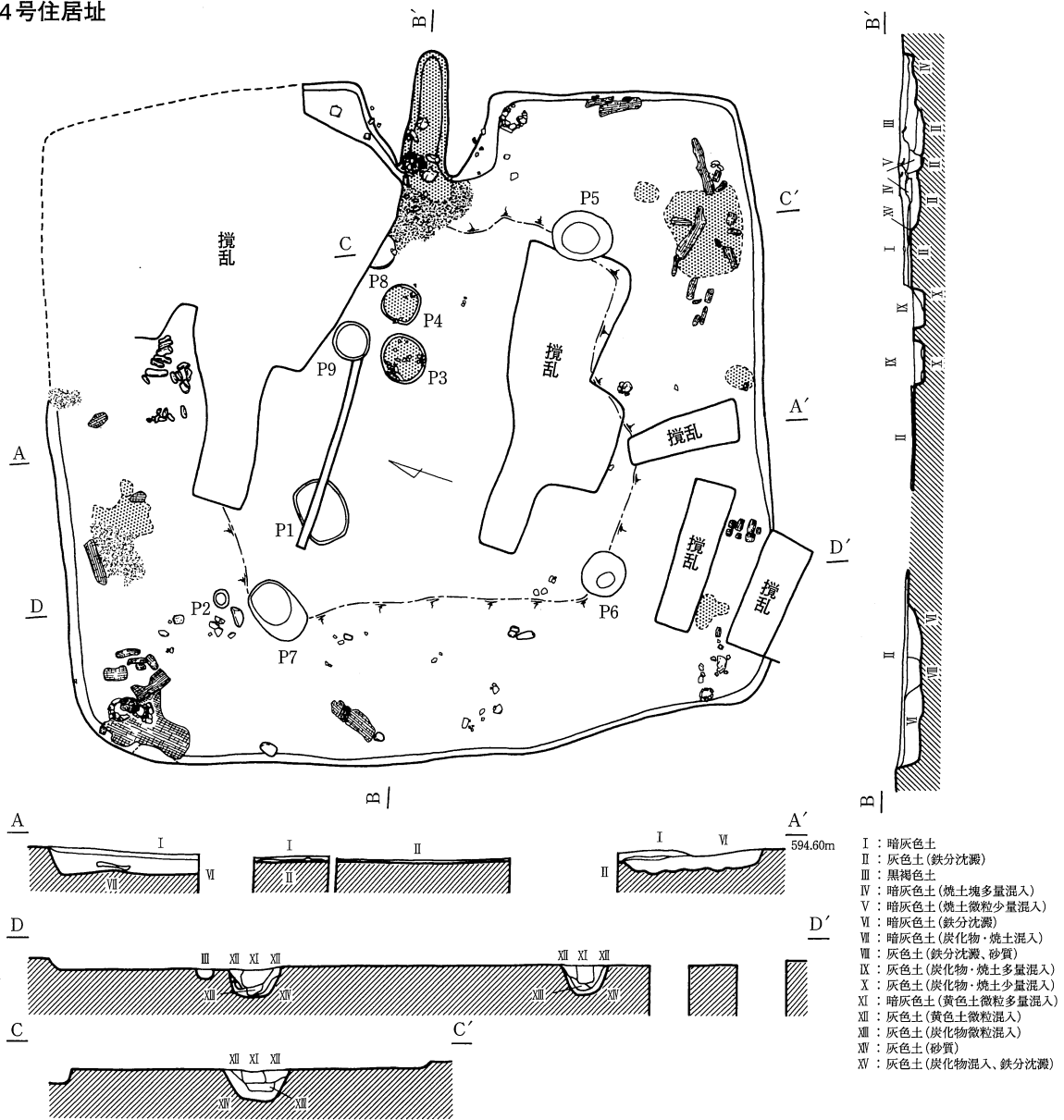
No	地点	器種	寸法 (cm)		残存度	紋様・調整		実測番号	注記	備考
			器高	口径		外面	内面			
28	6住	甕	23.8	(15.8)	口縁一部 底部完	口縁ヨコナデ、頸部・胴上部縦の工 具ナデ、胴中央以下ナデ摩滅	ナデ	6-4	高宮Ⅱ6住No13・14	
29	6住	大形甕?		(16.6)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、頸部ハケメ後縦ミガ キ、胴部剥離	ハケメ・ナデ後横～斜ミガキ	6-2	高宮Ⅱ6住No1・21	
30	7住	杯A		(15.0)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、体部板ナデ摩滅	板ナデ摩滅	7-6	高宮Ⅱ7住P4	ミガキなし
31	7住	杯A		(14.0)	口縁1/8	口縁ヨコナデ、体部縦ミガキ摩滅	板ナデ後横ミガキ	7-7	高宮Ⅱ7住No22	
32	7住	杯B			口縁1/2	体部横～斜ミガキ、底部ケズリ後一 部ミガキ	横ミガキ	7-17	高宮Ⅱ7住	
33	7住	杯A	7.3	11.4	口縁1/2 底部1/2	口縁ヨコナデ、体部ナデ後斜ミガ キ、底部ケズリ後ミガキ	工具ナデ後斜ミガキ	7-4	高宮Ⅱ7住No9	
34	7住	杯A		(10.8)	口縁1/6	口縁ヨコナデ、体部横ミガキ摩滅、 底部ケズリ	横ミガキ摩滅	7-5	高宮Ⅱ7住	
35	7住	高杯A			底部1/4	脚・胴部下半縦ミガキ、端部ヨコナデ	脚部絞り痕、脚部下半ナデ・ハケメ	7-1	高宮Ⅱ7住No3・22	
36	7住	高杯D?		(17.8)	口縁1/10	口縁ヨコナデ、杯部縦ミガキ摩滅、 底部ケズリ	ナデ後一部横ミガキ摩滅	7-16	高宮Ⅱ7住No20	内面黒色処理だがミガキを行って いない
37	7住	高杯		(17.0)	口縁1/10	口縁ヨコナデ、杯部工具ナデ	工具ナデ、黒色処理	7-12	高宮Ⅱ7住P11No2	
38	7住	高杯A			筒脚部4/5	脚部縦ミガキ	脚上半ナデ・下半ケズリ状工具ナデ	7-3	高宮Ⅱ7住No1	
39	7住	高杯C			杯部1/2 脚部1/3	杯部・脚部縦ミガキ摩滅	杯部ミガキ摩滅、脚部ナデ・ケズ リ状工具ナデ	7-2	高宮Ⅱ7住No11・14・16	
40	7住	短頸壺		(10.4)	口縁1/8	口縁ヨコナデ、頸部ナデ、胴部横 の工具ナデ	頸部部分的な工具ナデ、胴部横の ナデ、黒色処理?	7-15	高宮Ⅱ7住	内面黒であるがミガキはない
41	7住	小形甕		(10.6)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部横 の工具ナデ	頸部板ナデ	7-9	高宮Ⅱ7住・P12	
42	7住	甕		(16.0)	口縁1/6	口縁ヨコナデ、頸部縦ハケメ	頸部板ナデ	7-10	高宮Ⅱ7住E	
43	7住	甕		(7.2)	底部1/2	胴部工具ナデ、底部ケズリ	板ナデ後ナデ	7-8	高宮Ⅱ7住P2No2・P11No2	内外面ナデによりかなり平滑
44	7住	甕?		(17.8)	口縁1/6	口縁ヨコナデ、胴部板ナデ	指圧痕・板ナデ	7-14	高宮Ⅱ7住No5	受け口縁、頸部内面の稜など珍 しい土器
45	7住	甕		(17.6)	口縁1/8	口縁ヨコナデ、頸部摩滅不明	横ハケメ	7-11	高宮Ⅱ7住No3	
46	7住	甕		(15.6)	口縁1/4	口縁ヨコナデ、頸部工具ナデ?	工具ナデ	7-13	高宮Ⅱ7住NE	
47	7住	甕			底部完	頸部横ハケメ、胴下部工具ナデ摩 滅、底部ナデ(ケズリ?)	横の工具ナデ	7-18	高宮Ⅱ7住No26	図上復元
48	8住	杯			頸部1/10 底部1/4	体部ミガキ摩滅、底部ケズリ	ミガキ摩滅	9-6	高宮Ⅱ9住No24	出土地点変更
49	8住	杯A		(15.0)	口縁1/6	口縁ヨコナデ、体部横ミガキ摩滅	縦ミガキ摩滅	9-4	高宮Ⅱ9住床下	出土地点変更
50	8住	小型丸底 壺?		(10.0)	口縁1/4 底部1/3	口縁ヨコナデ、頸部ミガキ摩滅、底 部ケズリ?摩滅	頸部縦ミガキ	9-5	高宮Ⅱ9住No16・17・18・床下	胴部推定復元 出土地点変更
51	8住	壺?		(16.2)	口縁1/4	口縁ヨコナデ	ミガキ	9-3	高宮Ⅱ9住No12	出土地点変更
52	8住	甕		(18.0)	口縁1/4	口縁ヨコナデ	ハケメ、ナデ	9-2	高宮Ⅱ9住No23	出土地点変更
53	8住	甕		(17.4)	口縁1/2 胴部1/2	口縁ヨコナデ、胴部板ナデ摩滅	板ナデ摩滅	9-1	高宮Ⅱ9住No26	内面の接合痕顕著 出土地点変更
54	土坑30・31	甕		18.3	口縁3/4	口縁ヨコナデ	ヨコナデ	土30-1	高宮Ⅱ土坑30No1・5 土坑31No1	内外面摩滅著しい
55	土坑30	大形甕	20.5	11.4	口縁1/2 底部完	口縁ヨコナデ、胴部ハケメ後縦ミガ キ、底部ケズリ	口縁横ミガキ、胴部横ハケメ?後 ミガキ	土30-2	高宮Ⅱ土坑30No2・3・30	

No	地点	器種	寸法 (cm)		残存度	紋様・調整		実測番号	注記	備考
			器高	口径		外面	内面			
56	土坑31	甌		(10.0)	口縁一部	口縁ヨコナデ、頸部波状紋	ロクロナデ	土31-2		須恵器、内面自然釉付着
57	土坑31	小形甌	9.1	10.9	口縁1/2 底部1/4	縦ミガキ摩滅	ナデ・工具ナデ	土31-1	高宮Ⅱ土坑31の南ふち	
58	土坑32	高杯			口縁1/3	杯部ミガキ摩滅	横ミガキ摩滅	土32-6	高宮Ⅱ土32No1	ほぞ部残存
59	土坑32	高杯			底部1/6	杯部ミガキ摩滅	横ミガキ摩滅	土32-1	高宮Ⅱ土32No1	
60	土坑32	壺B		(14.4)	口縁1/6	口縁ヨコナデ・ミガキ摩滅	横ミガキ摩滅、頸部指ナデ	土32-4	高宮Ⅱ土32No5	
61	土坑32	壺B		(13.6)	口縁1/8	口縁ヨコナデ・斜ミガキ摩滅	斜ミガキ摩滅、頸部指ナデ	土32-5	高宮Ⅱ土32	
62	土坑32	壺B		15.2	口縁完	口縁ヨコナデ・横ミガキ	縦ミガキ、頸部ナデ後ハケメ	土32-2	高宮Ⅱ土32No6・7・8・検	
63	土坑32	壺A		(15.0)	口縁一部欠	口縁ヨコナデ・縦ミガキ摩滅	縦ミガキ、頸部ナデ	土32-3	高宮Ⅱ土32No3・4・5・7・検	
64	土坑32	甕?		(24.2)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、胴部縦ミガキ摩滅	横ミガキ摩滅	土32-7	高宮Ⅱ土32No9・検	
65	土坑33	高杯C		14.0	底部1/2	胴部横ハケメ後縦ミガキ、端部ヨコナデ	胴部上半ケズリ、下半ナデ	土33-1	高宮Ⅱ土33No2	焼成良好、堅緻
66	土坑33	小形甌		(4.6)	底部完	ナデ	工具ナデ、孔内面ケズリ	土33-2	高宮Ⅱ土33No3	
67	土坑33	甕		(17.2)	口縁1/8	口縁ヨコナデ、頸部ハケメ	ヨコナデ	土33-4	高宮Ⅱ土33No8	
68	土坑33	甕?		(5.6)	底部完	底部ケズリ	ナデ	土33-3	高宮Ⅱ土33No4	
69	土坑48	壺B		(15.6)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、胴部上半縦の工具ナデ・胴下ケズリ	胴部工具ナデ・指圧痕、胴下部ケズリ	土48-1	高宮Ⅱ土48No5・7	
70	土坑48	甕		(18.4)	口縁1/4	口縁ヨコナデ	ヨコナデ	土48-2	高宮Ⅱ土48No5	
71	土坑49	甕		(16.0)	口縁1/6	口縁ヨコナデ	ヨコナデ	土49-1	高宮Ⅱ土49	
72	土坑51	高杯		(17.2)	底部1/3	胴部上半ケズリ、下半ミガキ、端部ヨコナデ	ナデ	土51-1	高宮Ⅱ土51No2	
73	土坑54	高杯A		(15.0)	底部1/8	胴部下半ミガキ、端部ヨコナデ	ナデ	土54-1	高宮Ⅱ土54	
74	土坑54	埴?		—	底部完	胴部縦ミガキ摩滅、底部ナデ・ケズリ	胴部縦の工具ナデ、底部ナデ(指頭圧痕)	土54-3	高宮Ⅱ土54	
75	土坑54	甕		(14.6)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、頸部縦の工具ナデ	工具ナデ	土54-2	高宮Ⅱ土54	
76	P33	甕		(7.6)	底部完	胴部縦・底部横ケズリ	工具ナデ	P33-1	高宮ⅡP33	
77	流路2	杯蓋?		(12.6)	口縁1/10	口縁ヨコナデ、ロクロナデ	ロクロナデ	溝1-26	高宮Ⅱ溝INo59	須恵器
78	流路2	杯A		(12.8)	口縁1/8	口縁ヨコナデ、体部ミガキ摩滅	板ナデ後横ミガキ	溝1-6	高宮Ⅱ溝IC区	
79	流路2	杯C		(15.0)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、体部ハケメ後ミガキ摩滅	ハケメ後横ミガキ	溝1-5	高宮Ⅱ溝IC区	
80	流路2	高杯A			筒脚完	口縁ヨコナデ、体部ハケメ後ミガキ摩滅	縦ミガキ	溝1-4	高宮Ⅱ溝No4	
81	流路2	高杯		(14.5)	底部1/8	縦ミガキ、端部ヨコナデ	工具ナデ	溝1-10	高宮Ⅱ溝INo57	
82	流路2	高杯		(17.4)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、杯部縦ミガキ	縦ミガキ	溝1-8		
83	流路2	高杯		(15.6)	口縁1/6	口縁ヨコナデ、杯部縦ミガキ	縦ミガキ	溝1-7	高宮Ⅱ溝INo9	
84	流路2	高杯C		(17.8)	口縁1/3 脚上完 底部1/6	口縁ヨコナデ、杯部・脚部縦ミガキ、端部ヨコナデ	杯部縦ミガキ、脚部上半ケズリ・下半ハケメ後ナデ	溝1-2	高宮Ⅱ溝INo3・8	
85	流路2	高杯A	10.5	(16.7)	口縁1/8 杯・脚完 底部1/2	口縁ヨコナデ、杯部ハケメの後縦ミガキ、脚部縦ミガキ、端部ヨコナデ	杯部縦ミガキ、脚部ケズリ後ナデ	溝1-1	高宮Ⅱ溝INo1	外面モミ圧痕
86	流路2	高杯	17.1	(16.6)	口縁1/10 底部1/6	ロクロナデ、杯部波状紋2条・底面タタキ、脚部長方形スカシ	ロクロナデ	溝1-25	高宮Ⅱ溝INo33・36・38・39・40・60・72・76・82・ベルト	須恵器、脚部スカシ8単位
87	流路2	壺B		(13.4)	口縁1/8	口縁ヨコナデ	口縁ヨコナデ	溝1-21	高宮Ⅱ溝INo41	
88	流路2	壺A		(15.0)	底部1/8	口縁ヨコナデ、ナデ摩滅	ナデ摩滅	溝1-14	高宮Ⅱ溝INo2	
89	流路2	壺		5.6	底部完	工具ナデ後ミガキ、底部ミガキ	工具ナデ	溝1-9	高宮Ⅱ溝INo52	
90	流路2	壺	(34.0)	(18.9)	口縁1/4 底部1/3	口縁縦棒状浮紋、胴上半部描横線紋・筒插山形紋、頸部縦ミガキ、胴下ケズリ後横ミガキ、底部ナデ	頸部ケズリ後ミガキ、胴部ハケメ	検-15	高宮Ⅱ検No23・27・溝INo22	古墳前期初頭、図上復元

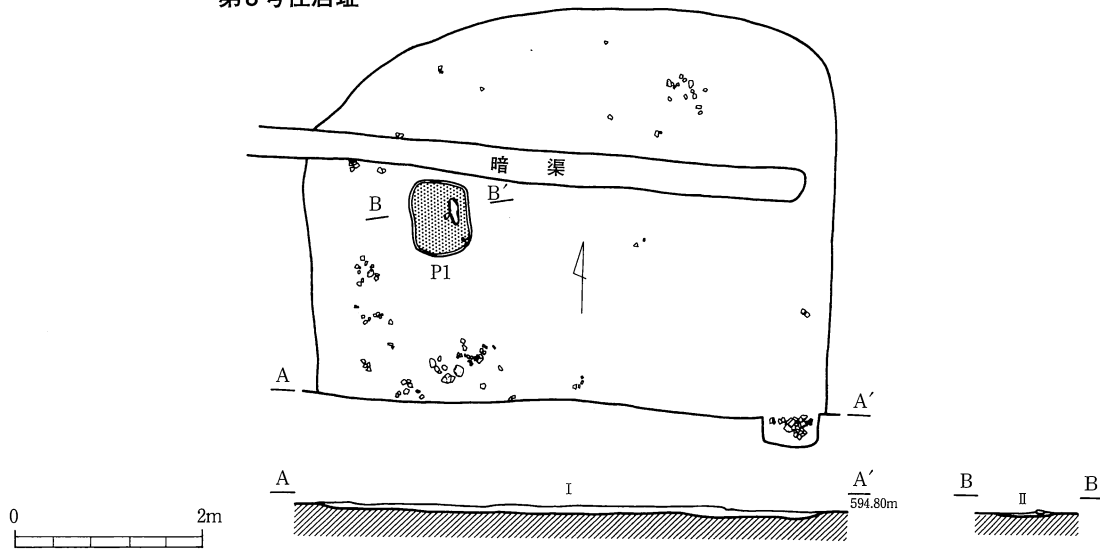
No	地点	器種	寸法 (cm)			残存度	紋様・調整		美測番号	注記	備考
			器高	口径	底径		外面	内面			
91	流路2	甕	(18.4)		口縁1/8	口縁ヨコナデ	ナデ	溝1-20	高宮II溝1		
92	流路2	甕	(17.0)		口縁1/8	口縁ヨコナデ、ナデ	工具ナデ	溝1-17	高宮II溝INo31		
93	流路2	甕	6.0		底部完	工具ナデ、底部ナデ摩滅	ナデ	溝1-19	高宮II溝INo32		
94	流路2	甕?			底部1/4	ナデ	ナデ	溝1-16	高宮II溝INo40	ミニチュア?	
95	流路2	甕	(10.0)		口縁1/8	口縁ヨコナデ、頸部・胴部工具ナデ、底部ケズリ	工具ナデ	溝1-18	高宮II溝INo32		
96	流路2	甕	(13.5)		底部3/4	口縁ヨコナデ、胴部摩滅不明	工具ナデ	溝1-13	高宮II溝INo51		
97	流路2	甕	(13.8)		口縁1/8	口縁ヨコナデ、工具ナデ摩滅	工具ナデ	溝1-12	高宮II溝INo13		
98	流路2	甕	(11.2)		口縁1/4 胴部1/3	口縁ヨコナデ、頸部・胴部工具ナデ	口縁部ミガキ、頸部・胴部ケズリ 状工具ナデ後ミガキ	溝1-11	高宮II溝INo32		
99	流路2	甕	(13.2)		口縁1/10	口縁摩滅、頸部波状紋摩滅	摩滅不明	溝1-23	高宮II溝INo69	弥生土器	
100	流路2	甕	(19.0)		口縁1/10	口縁ヨコナデ、頸部ナデ摩滅、胴部波状紋摩滅	ナデ摩滅	溝1-22	高宮II溝INo42	弥生土器	
101	流路2	甕	(25.0)		口縁1/6	口縁ヨコナデ、頸部斜の工具ナデ後 波状紋、胴部工具ナデ摩滅	工具ナデ摩滅	溝1-24	高宮II溝1	弥生土器	
102	流路3	杯A	(13.6)		口縁1/4	口縁ヨコナデ、体部縦ミガキ摩滅	縦ミガキ摩滅	溝2-4	高宮II溝2		
103	流路3	高杯B			杯部1/6	縦ミガキ摩滅	縦ミガキ摩滅	溝2-3	高宮II溝2		
104	流路3	高杯C	10.7		底部1/2	胴部縦ミガキ摩滅、端部ヨコナデ	上半ナデ(ケズリ)摩滅、下半ハケメ	溝2-1	高宮II溝2No1		
105	流路3	壺A	(17.8)		口縁1/4	口縁ヨコナデ・縦ミガキ	ヨコナデ	溝2-2	高宮II	二重口縁が剥離	
106	土器集中区16	杯A	(14.0)		口縁1/8	口縁ヨコナデ、体部縦ミガキ	縦・横ミガキ	土56-1	高宮II土56No3		
107	土器集中区16	杯A	5.6	(14.0)	口縁1/8	口縁ヨコナデ、体部縦ミガキ、底部 ケズリ後ミガキ摩滅	横ミガキ摩滅	土集16-5	高宮II土集16No8		
108	土器集中区16	杯B	4.1	(11.6)	口縁1/2	口縁ヨコナデ、体部縦ミガキ摩滅、 底部ケズリ	横ミガキ	土集16-1	高宮II土集16No1		
109	土器集中区16	直口壺?	11.5	(11.0)	口縁1/2	口縁ヨコナデ、胴部ナデ摩滅、底部 ケズリ摩滅	ハケメ摩滅	土集16-2	高宮II土集16No2		
110	土器集中区16	小形瓶	8.9	(15.2)	口縁2/3	口縁ヨコナデ、胴部ナデ(ミガキ)・ケ ズリ摩滅?、底部ケズリ	上半ナデ・下半ケズリ	土集16-7	高宮II土集16No3		
111	土器集中区16	小形瓶	11.1	16.7	口縁3/5	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ摩滅	工具ナデ・絞り痕	土56-4	高宮II土56No5	内面タール状付着	
112	土器集中区16	甕	24.6		底部完	口縁ヨコナデ、胴部板ナデ後縦ミガキ	板ナデ後ナデ	土集16-6	高宮II土集16No6		
113	土器集中区16	大形甕?	(22.0)		口縁1/8	口縁ヨコナデ、ミガキ?摩滅	頸部横ミガキ摩滅	土56-2	高宮II土56No4	内外面炭化物付着	
114	土器集中区16	壺B	28.8	16.1	口縁3/4	口縁ヨコナデ・縦・横ミガキ、胴部 工具ナデ後ミガキ、底部際ケズリ	工具ナデ	土53-1	高宮II土56No2		
115	土器集中区16	甕	15.1		口縁2/3	口縁ヨコナデ、頸部縦の板ナデ	口縁板ナデ後ヨコナデ摩滅、頸部 ハケメ後ナデ	土集16-4	高宮II土集16No7		
116	土器集中区16	甕	(6.4)		底部完	工具ナデ摩滅、底部木葉印痕後ナデ	工具ナデ	土56-3	高宮II土56No3・11		
117	土器集中区16	甕	(18.9)		口縁1/8	口唇ヨコナデ、頸部ハケメ摩滅	口縁横ハケメ、胴部ナデ	土集16-3	高宮II土集16No11		
118	検出面	杯A	(9.3)		口縁1/4	口縁ヨコナデ、体部工具ナデ	工具ナデ	検-8	高宮II検No19		
119	検出面	杯B	5.05	(8.05)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、体部上半ミガキ摩 滅・下半ケズリ、底部ナデ	ナデ・ミガキ摩滅	検-7	高宮II検No36		
120	検出面	杯B	5.3	(11.4)	口縁1/5	口縁ヨコナデ、体部上半ミガキ摩滅・ 下半ケズリ後ナデ摩滅、底部ナデ	工具ナデ後ミガキ摩滅	検-6	高宮II検No39		
121	検出面	杯A	5.5	(13.4)	口縁1/2	口縁ヨコナデ、体部上半ミガキ摩 滅・下半ケズリ摩滅	ミガキ摩滅	検-3	高宮II検No13		

No	地点	器種	寸法 (cm)		残存度	紋様・調整		実測番号	注記	備考
			器高	口径		外面	内面			
122	検出面	高杯		(16.0)	口縁1/2	口縁ヨコナデ、杯部ミガキ摩滅	ミガキ摩滅	検-4	高宮II 検No46	
123	検出面	高杯C			脚上完	ミガキ摩滅	ケズリ・ナデ摩滅	検-2	高宮II 検22-J	
124	検出面	高杯		(21.0)	口縁1/8	口縁ヨコナデ、杯部ハケメ後ミガキ摩滅	ミガキ摩滅	検-5	高宮II 検No33	
125	検出面	高杯A			筒脚完	杯部・脚部ミガキ摩滅	ミガキ、脚部ケズリ	検-1	高宮II 検No20	
126	検出面	埴		-	胴部完 底部完	脚上半ハケメ後ミガキ摩滅・下半ケズリ? 摩滅	頸部絞り痕・工具ナデ	検-11	高宮II 検No34	
127	検出面	甕		-	底部完	頸部ナデ、胴上部ハケメ後ナデ・下部ケズリ後ハケメ	頸部ケズリ状工具ナデ、胴部工具ナデ	検-10	高宮II 検No1	
128	検出面	甕		(17.8)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、胴部工具ナデ(一部ケズリ状)	工具ナデ	検-12	高宮II 検No37	
129	検出面	甕		15.6	口縁ほぼ完	口縁ヨコナデ	工具ナデ	検-9	高宮II 検No44	
130	検出面	甕		(16.6)	口縁一部	口縁一部 口唇ヨコナデ、ロクロナデ	ロクロナデ	検-13	高宮II 検No26	須恵器、内外自然釉
131	混入品	甕		(21.2)	口縁1/10	口縁ヨコナデ、頸部ナデ後波状紋(下から上へ)	板ナデ・一部ミガキ	土55-4	高宮II 土55フク土	弥生土器、出土地点変更
132	試掘	杯A		(12.0)	口縁1/4	口縁ヨコナデ、体部ミガキ摩滅、底部ヘラケズリ	縦ミガキ	試掘-2	高宮II 試掘	
133	試掘	杯C	6.1	14.1	口縁完 底部完	口縁ヨコナデ、体部ミガキ摩滅、底部ヘラケズリ	ミガキ摩滅	試掘-3	高宮II 試掘I トレンチ	
134	試掘	甕		(19.6)	口縁1/4	口縁ヨコナデ		試掘-1	高宮II 試掘	
135	7住	ミニチュア		(3.4)	底部1/2	ナデ	ナデ	7-19	高宮II 7住No11	
136	土坑54	ミニチュア	4.3	(3.2)	口縁一部 底部3/4	口縁ヨコナデ、胴部・底部ナデ	ナデ	土54-4	高宮II 土54	
137	検出面	紡錘車							高宮II 検出面	紡錘車

第4号住居址

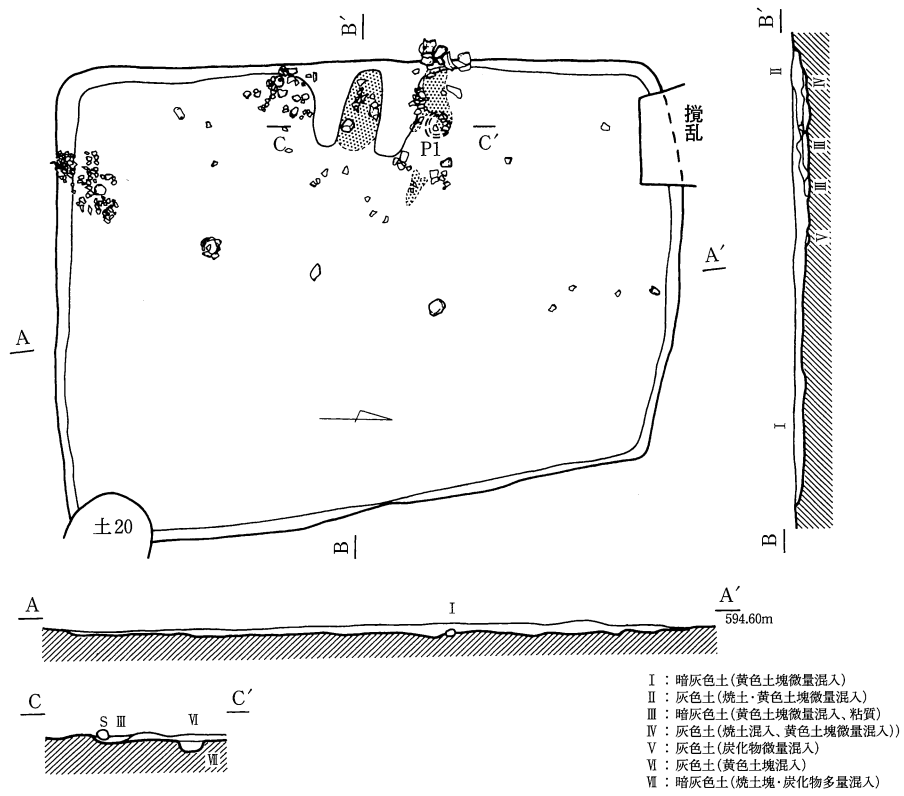


第8号住居址

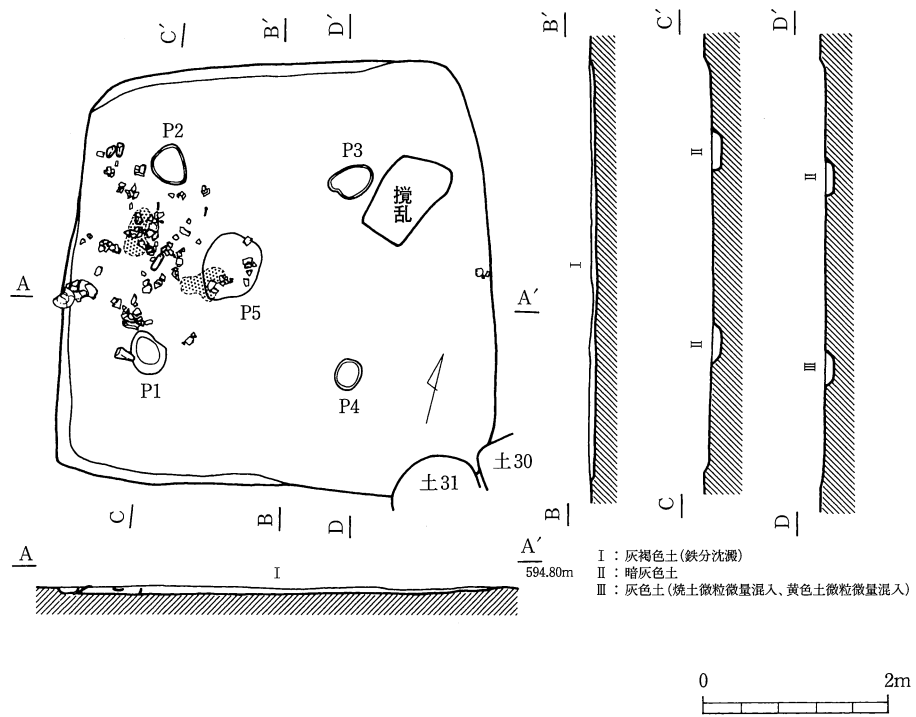


图版1 第4号住居址·第8号住居址

第5号住居址

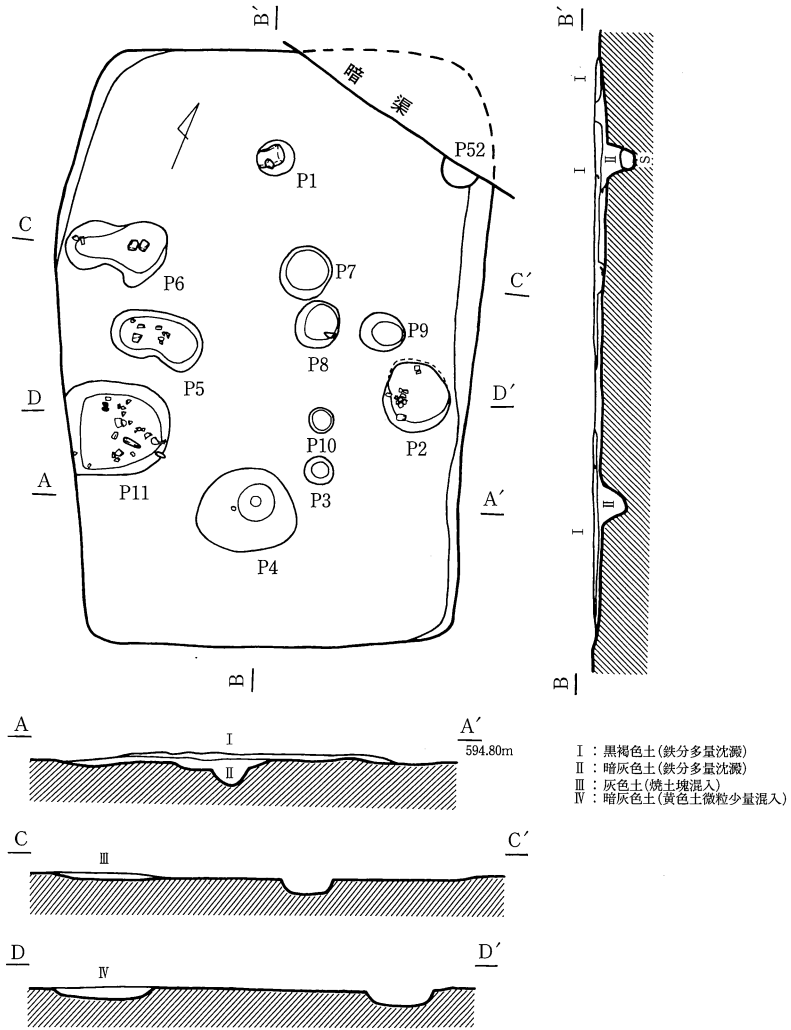


第6号住居址

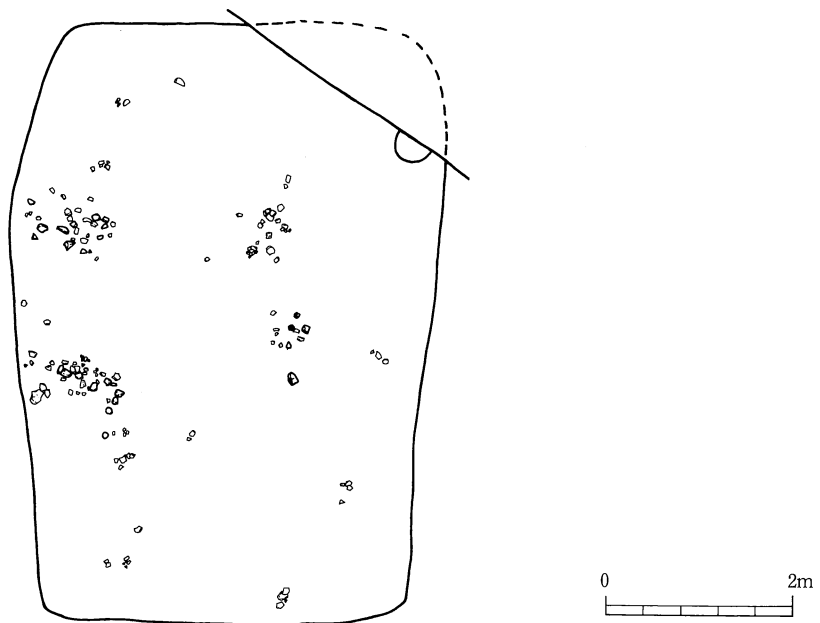


图版2 第5号住居址·第6号住居址

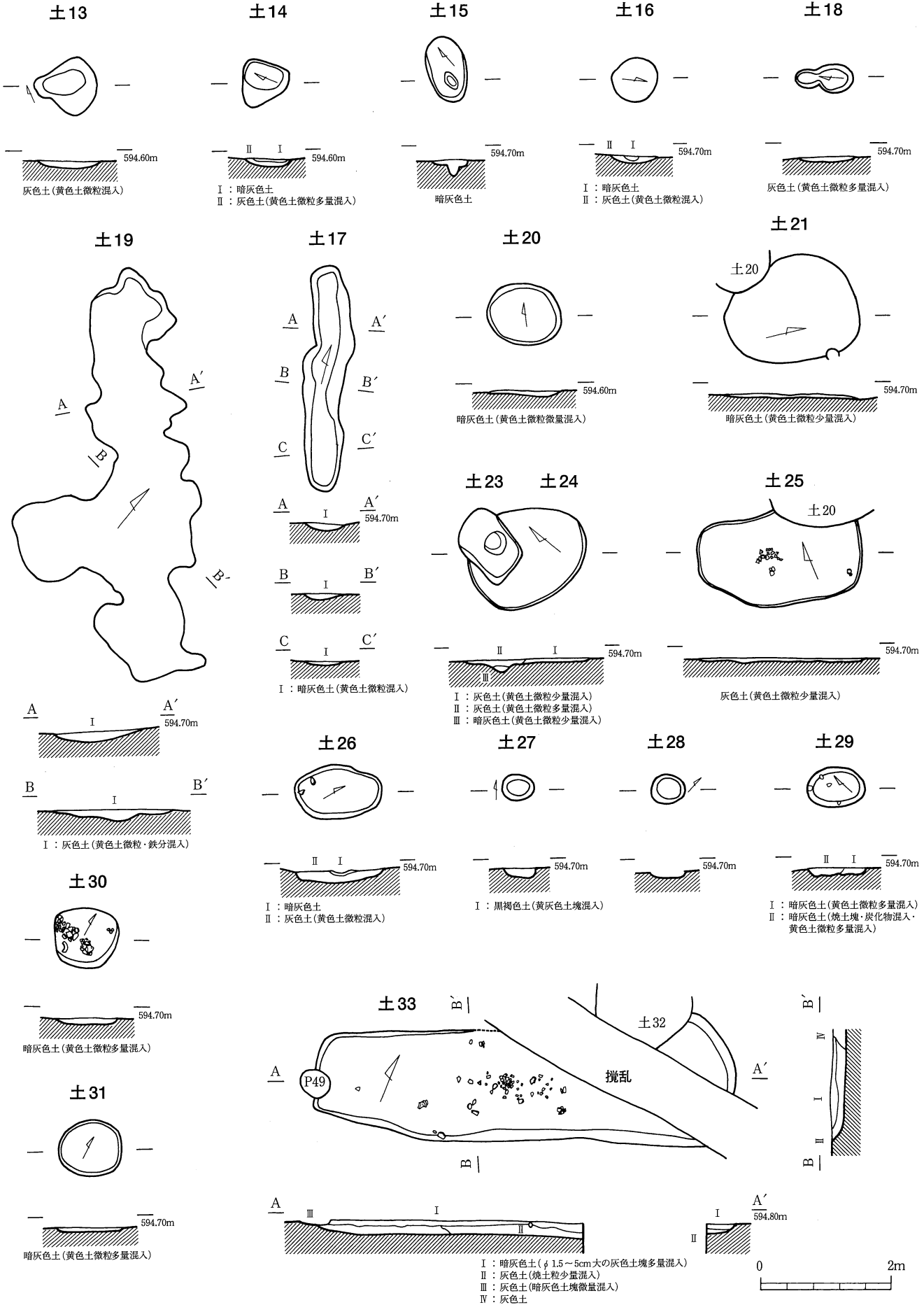
第7号住居址



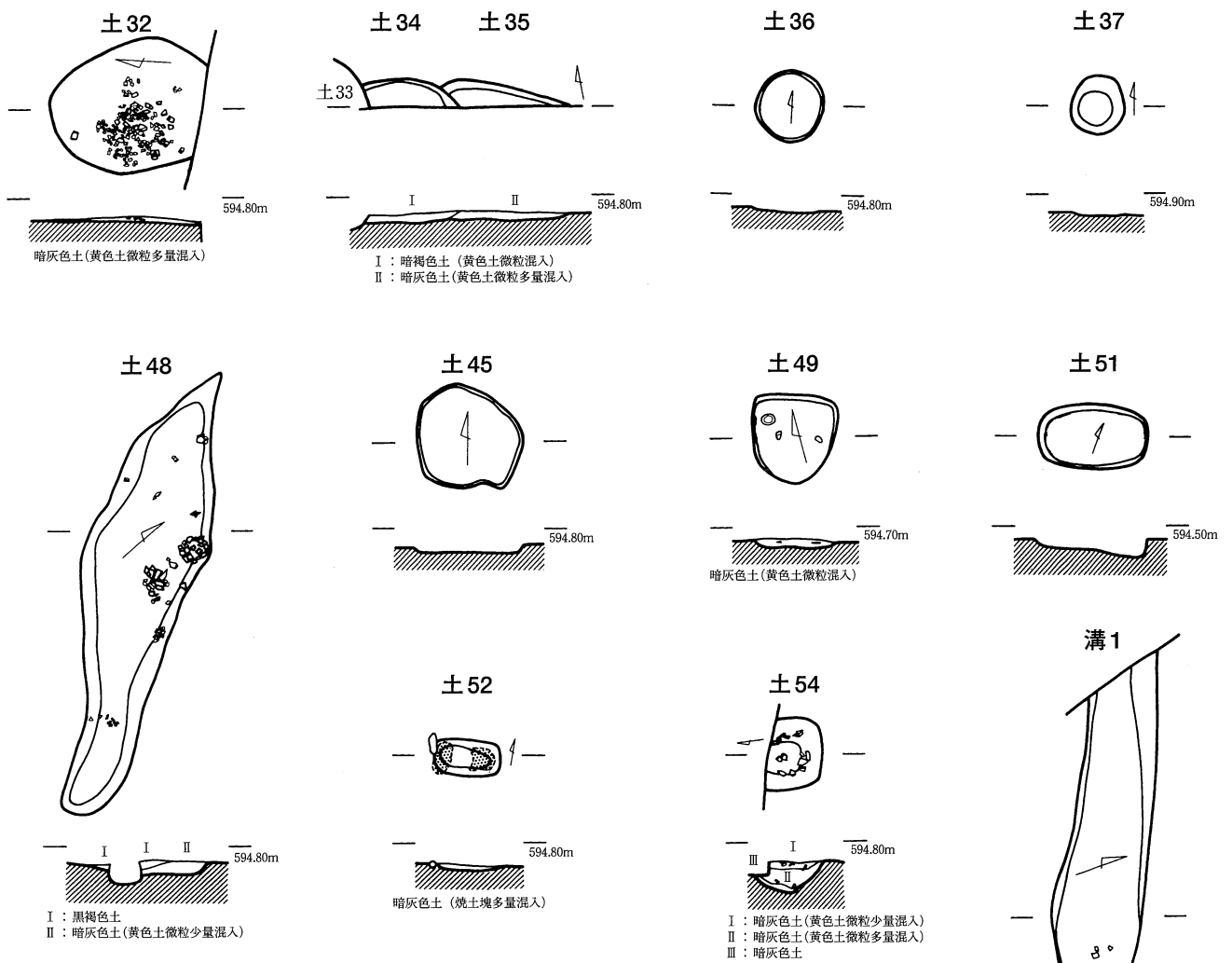
第7号住居址遺物出土狀況



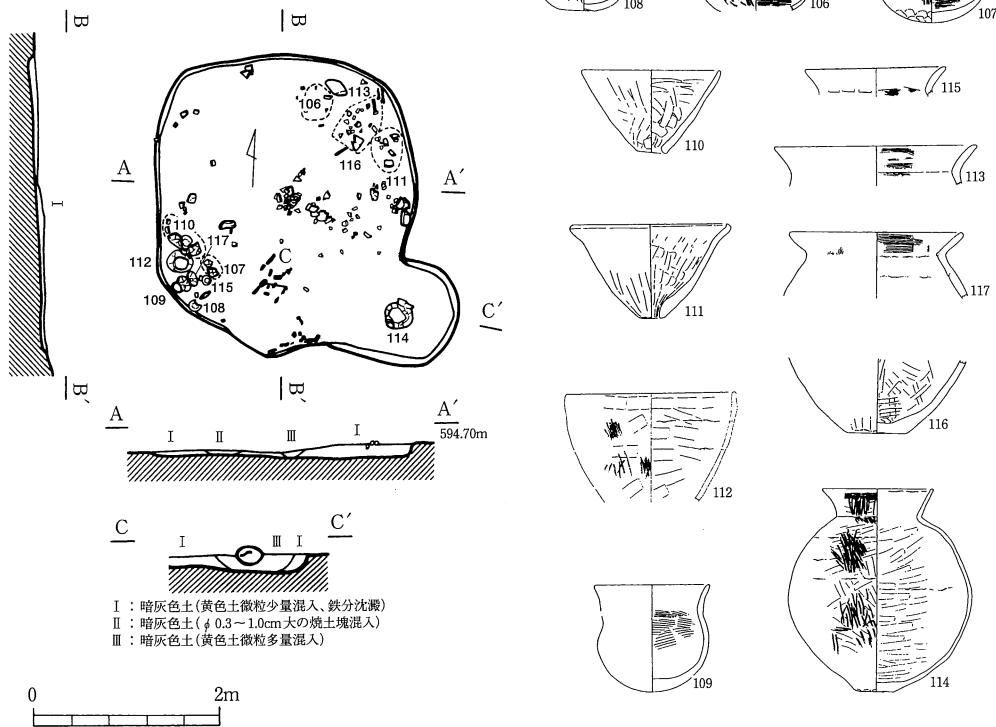
図版3 第7号住居址・同遺物出土図



図版4 土坑(1)

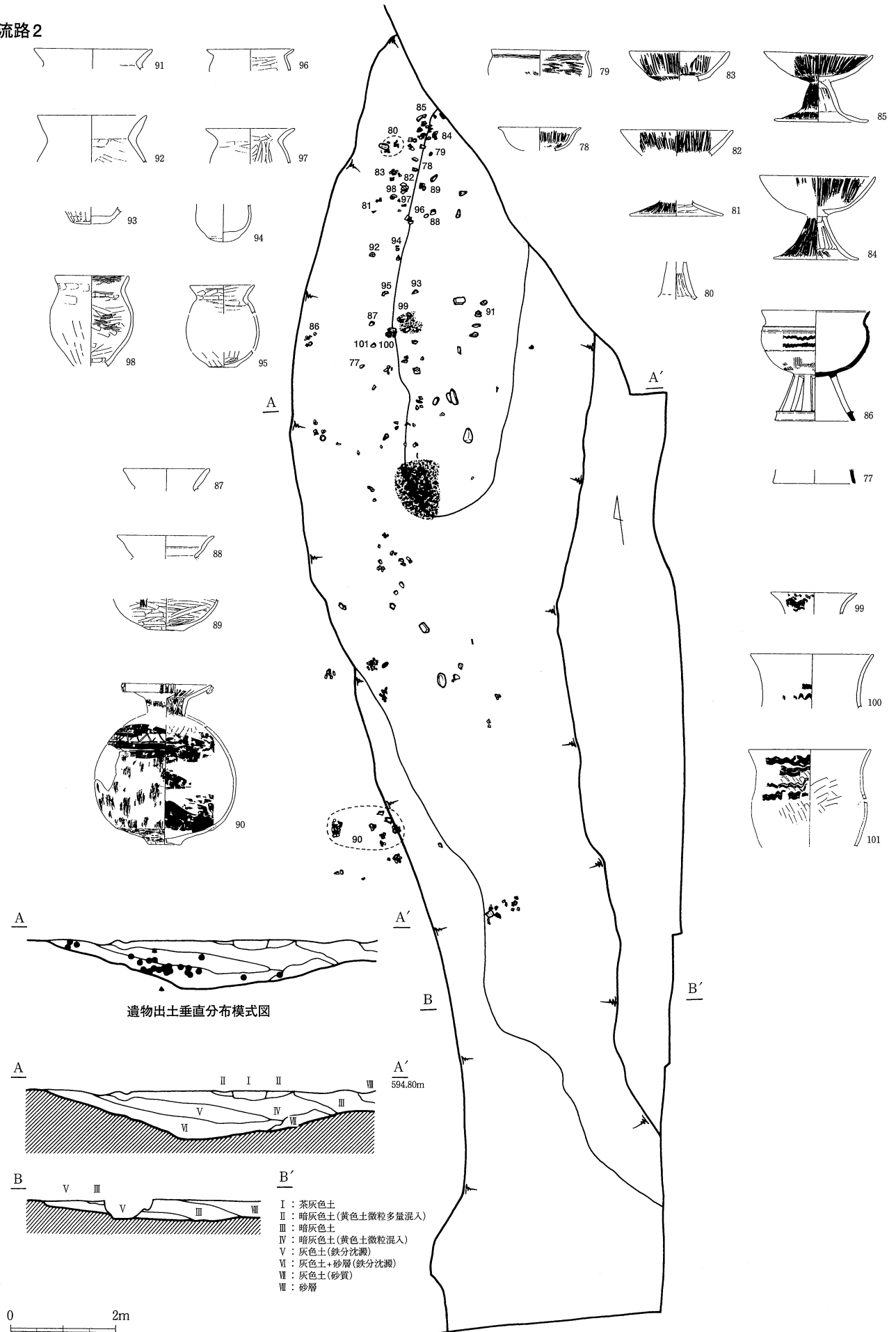


土器集中区 16



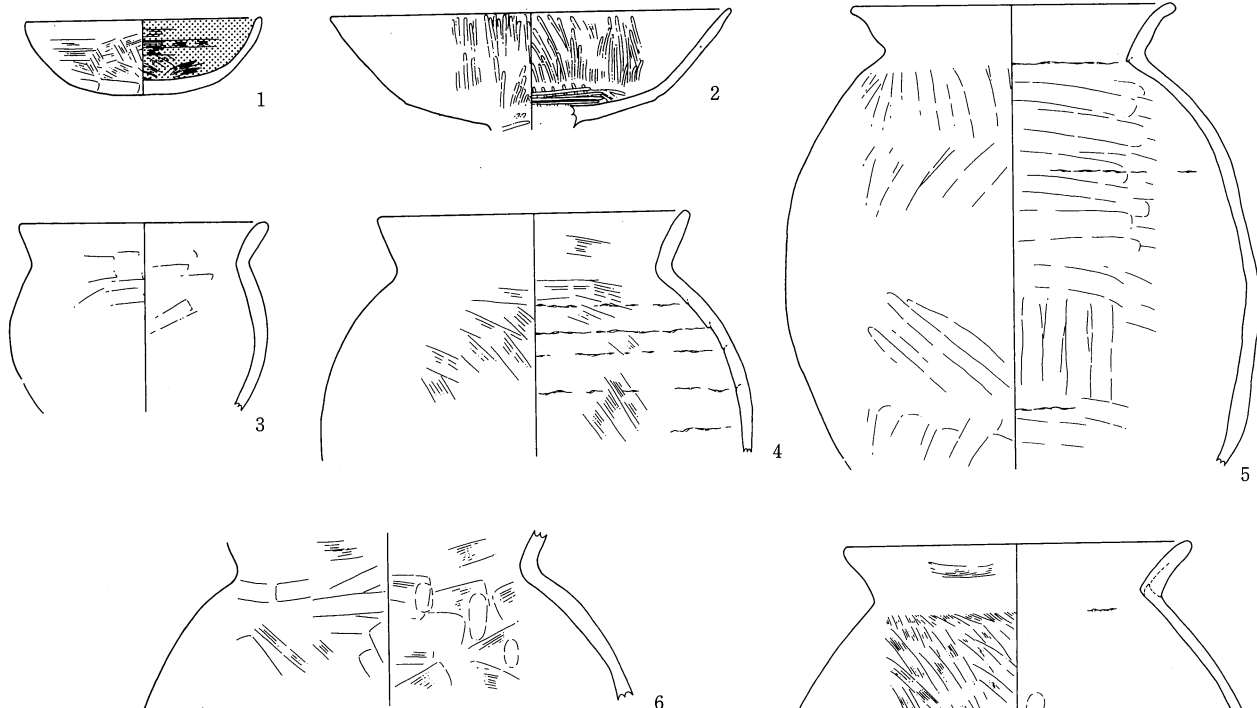
图版5 土坑(2)·溝·土器集中区

流路2

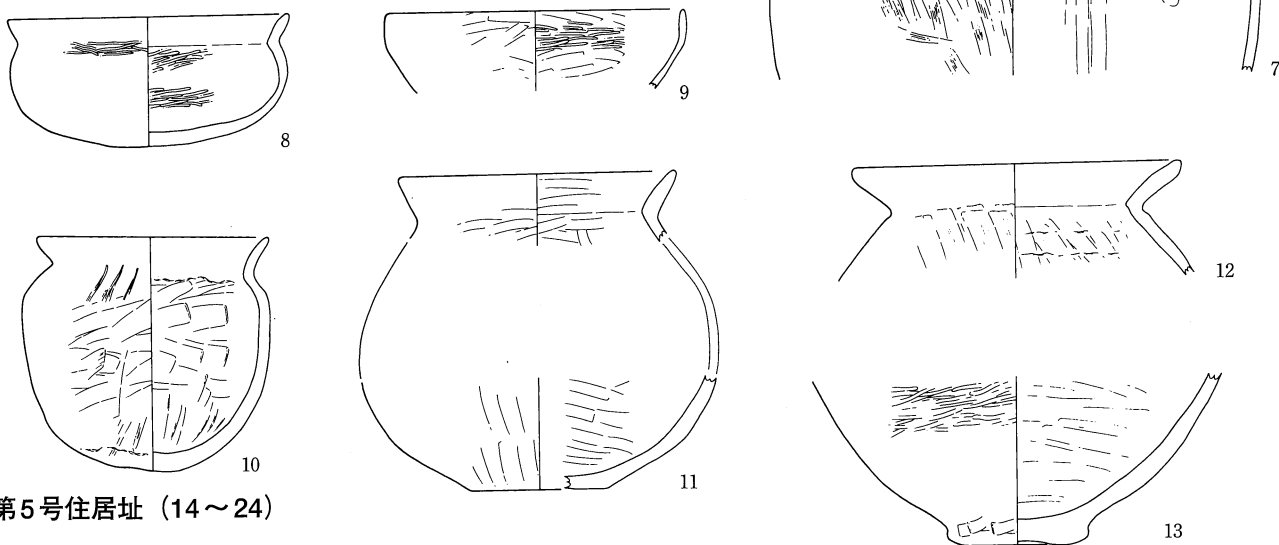


図版6 流路2

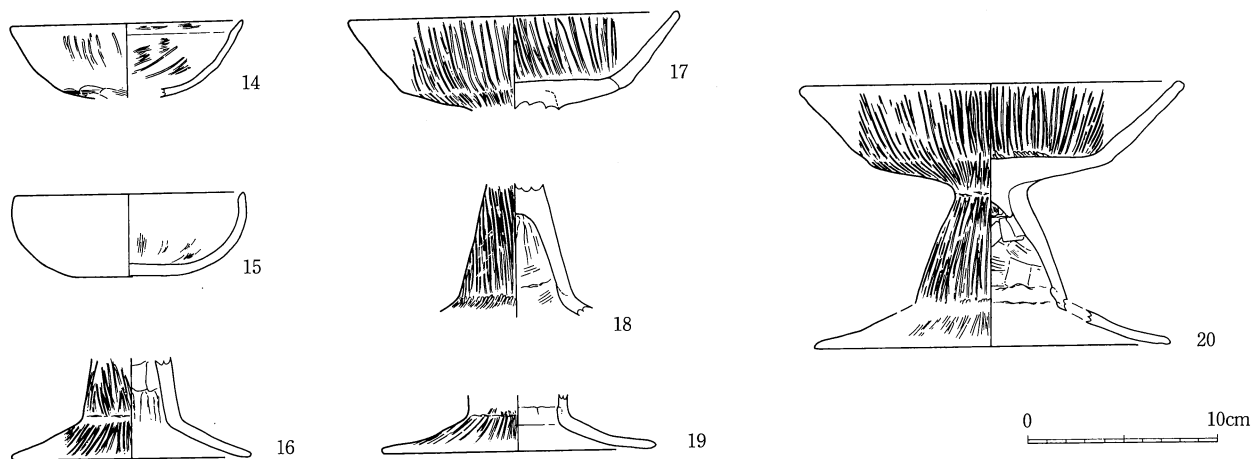
第4号住居址 (1~7)



第4号住居址掘り方 (8~13)

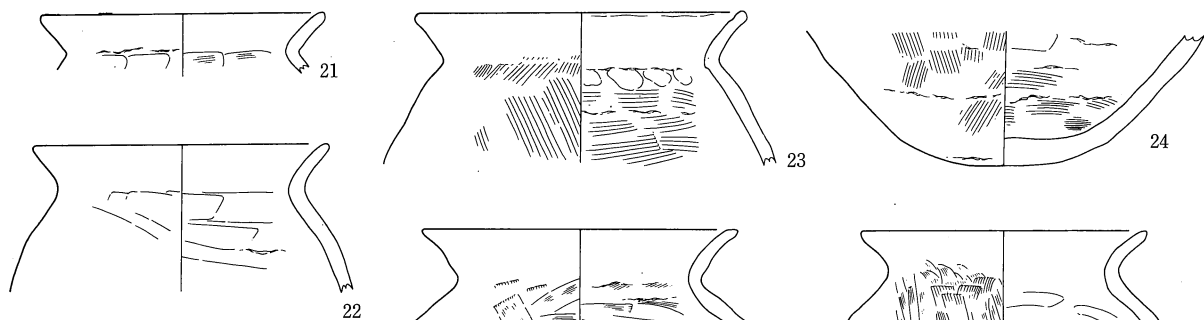


第5号住居址 (14~24)

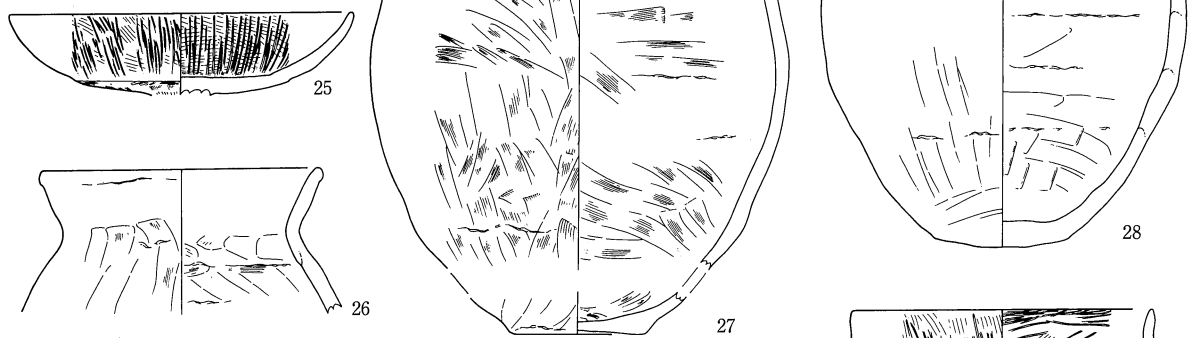


0 10cm

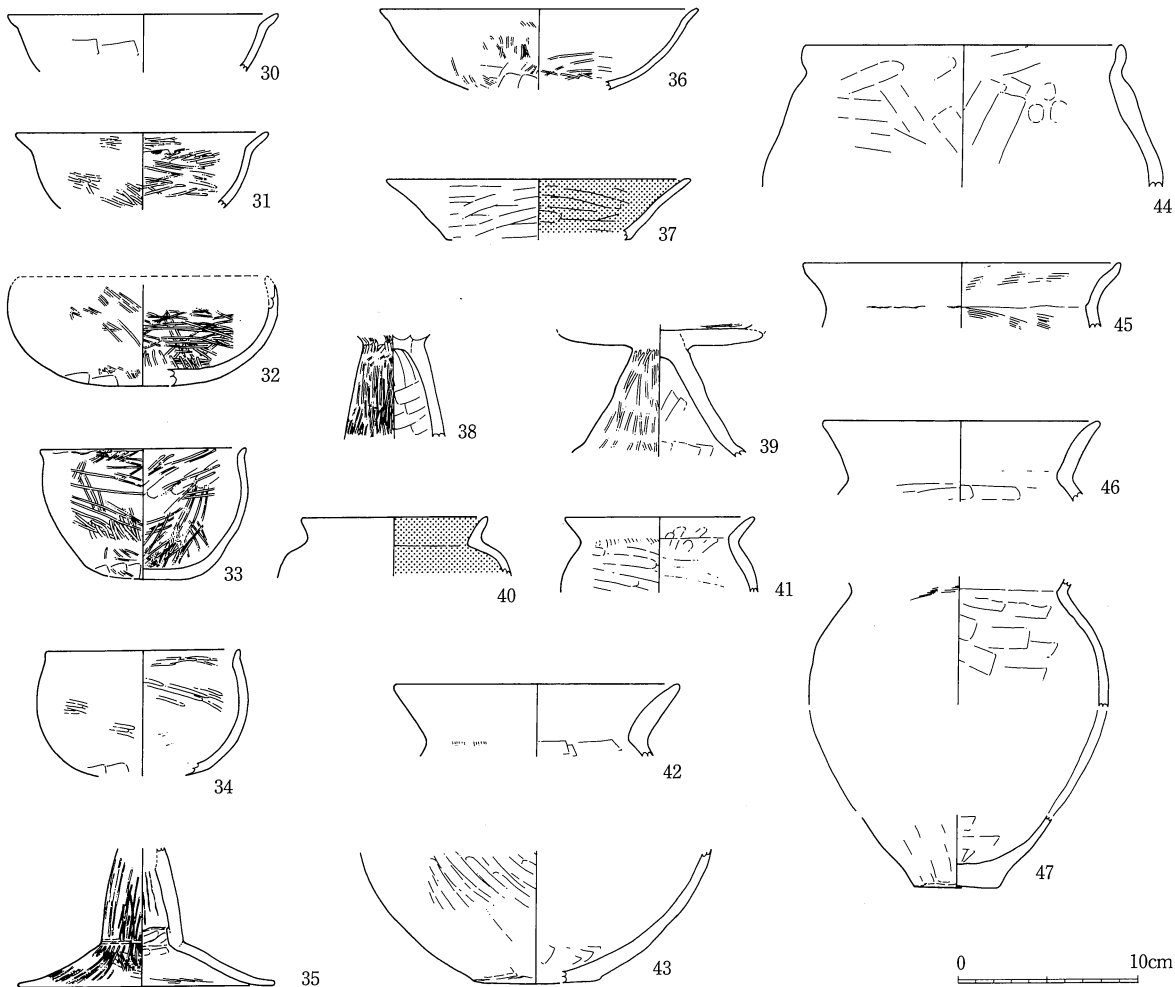
图版7 土器 (1)



第6号住居址 (25~29)

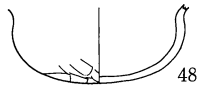


第7号住居址 (30~47)

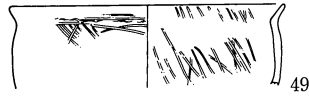


图版8 土器 (2)

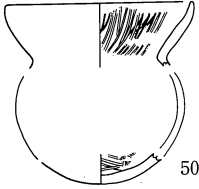
第8号住居址 (48~53)



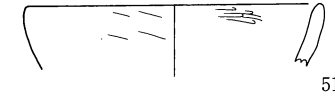
48



49



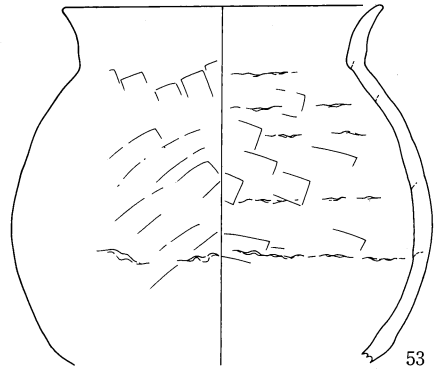
50



51

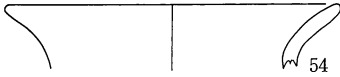


52

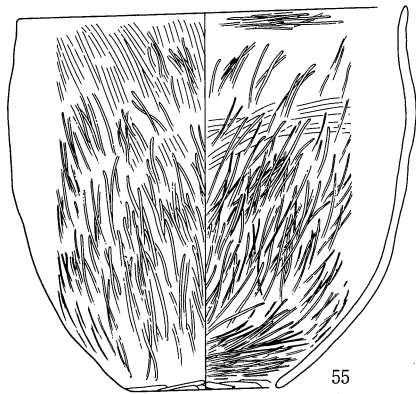


53

土坑30 (54·55)

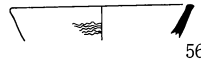


54

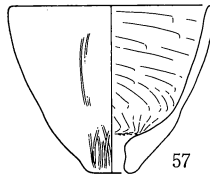


55

土坑31 (56·57)



56

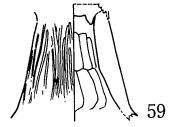


57

土坑32 (58~64)



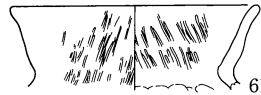
58



59



60

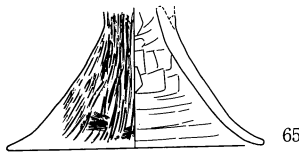


61

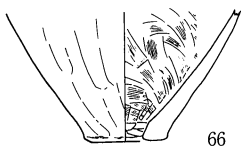


63

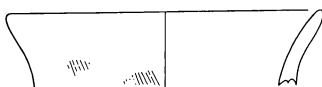
土坑33 (65~68)



65



66



67

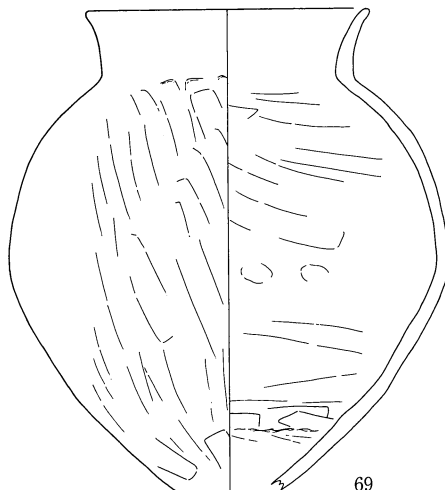


68

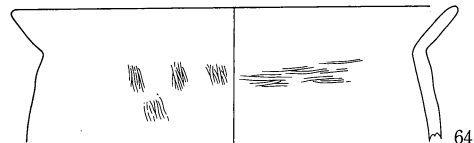
土坑48 (69·70)



69



69

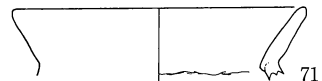


70

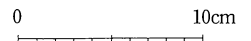
土坑49 (71)



70



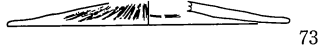
71



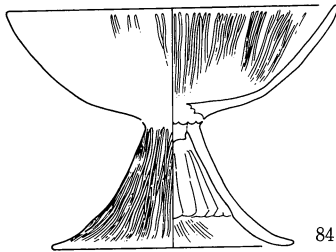
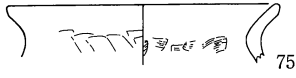
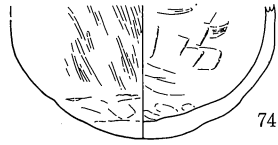
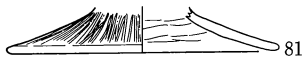
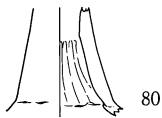
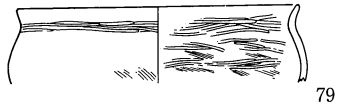
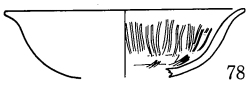
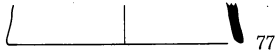
土坑51 (72)



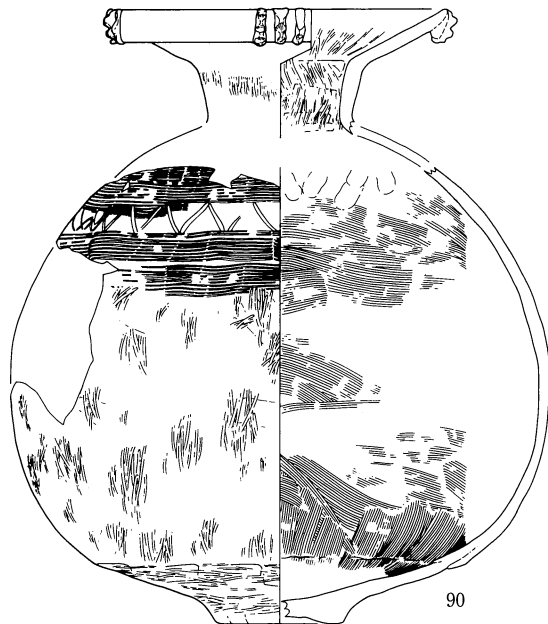
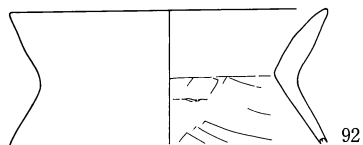
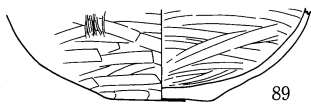
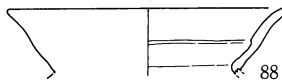
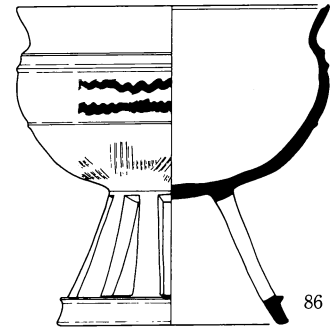
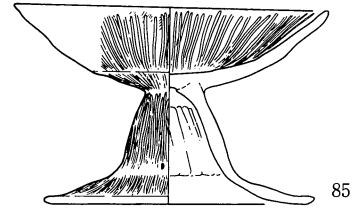
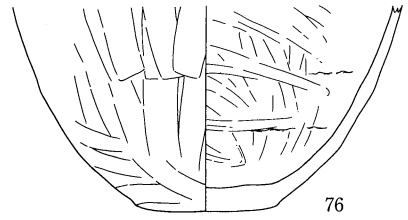
土坑54 (73~75)



流路2 (77~101)

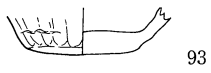


ピット33 (76)

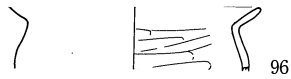


0 10cm

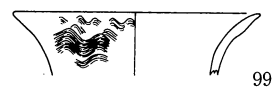
図版10 土器 (4)



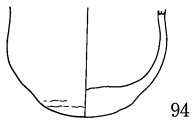
93



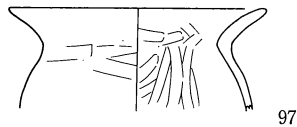
96



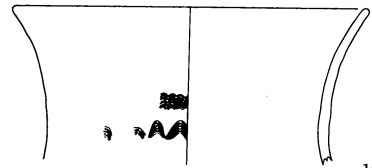
99



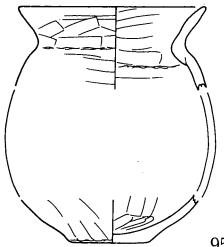
94



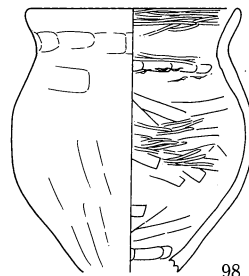
97



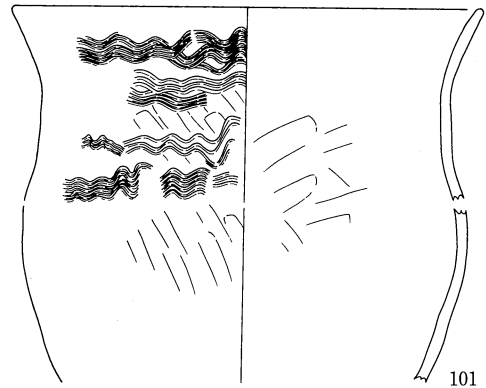
100



95

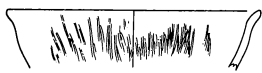


98

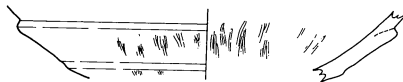


101

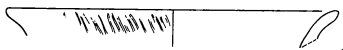
流路3 (102~105)



102



103



105

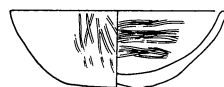


104

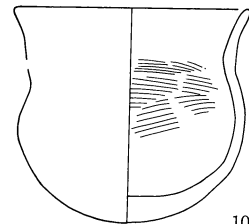
土器集中区 16 (106~117)



106



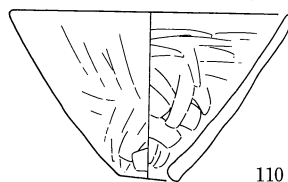
108



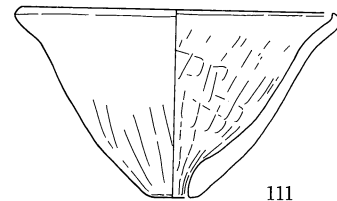
109



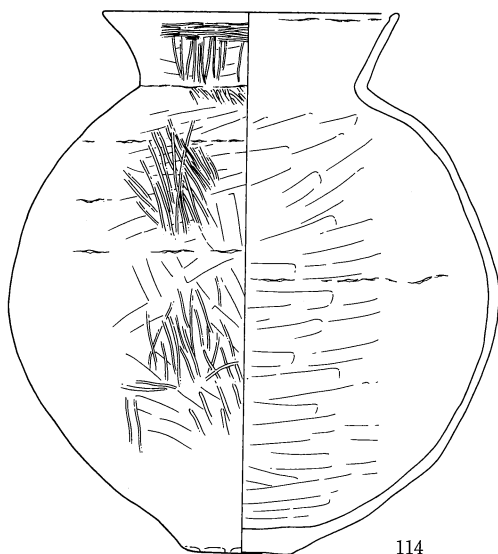
107



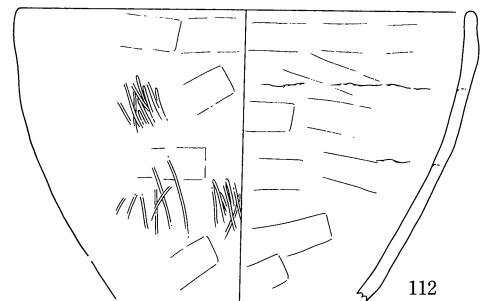
110



111



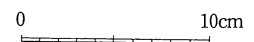
114



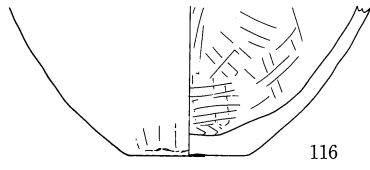
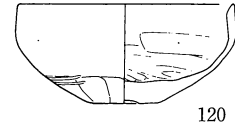
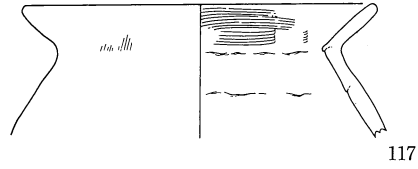
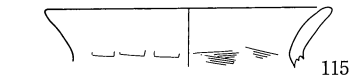
112



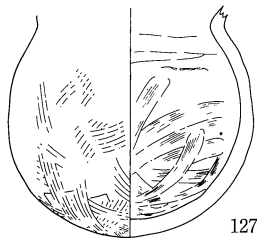
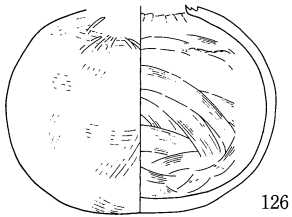
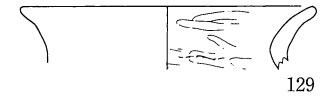
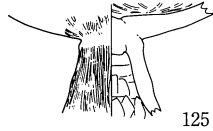
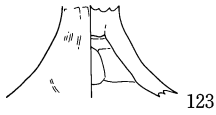
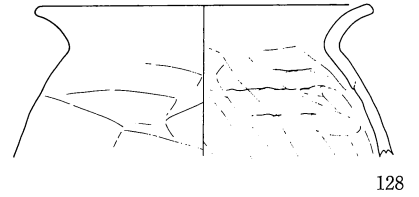
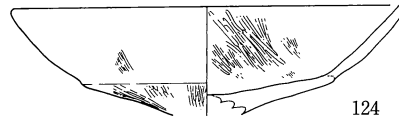
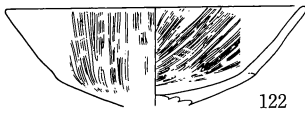
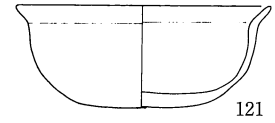
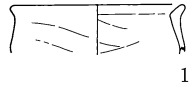
113



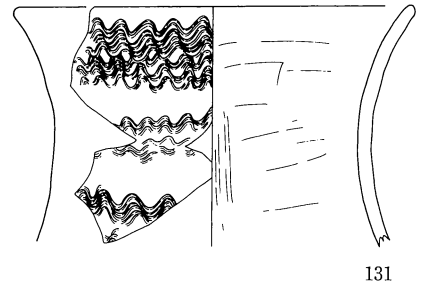
图版11 土器 (5)



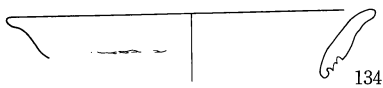
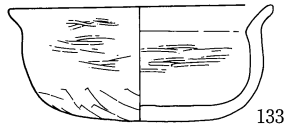
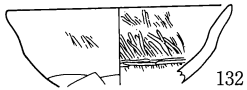
検出面 (118~130)



混入品 (131)



試掘 (132~134)

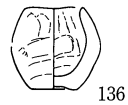


0 10cm

第7号住居址 (135)

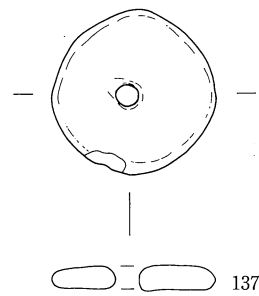


土坑54 (136)



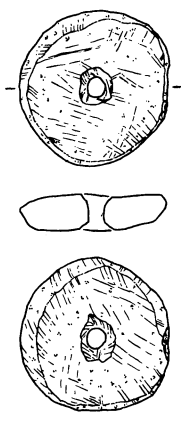
0 10cm

検出面 (137)

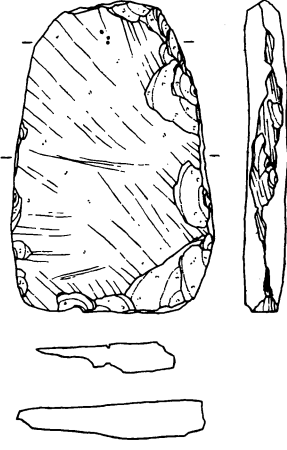


0 5cm

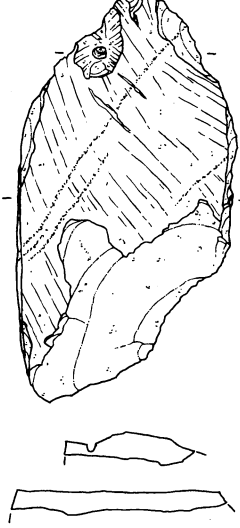
図版12 土器 (6) ・土製器



12
有孔石製品
粘板岩
6住 覆土



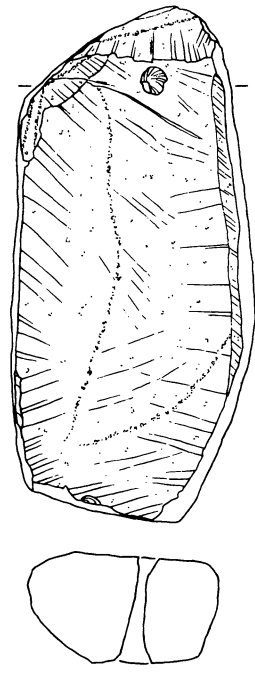
13
砥石状石器
粘板岩
6住 覆土



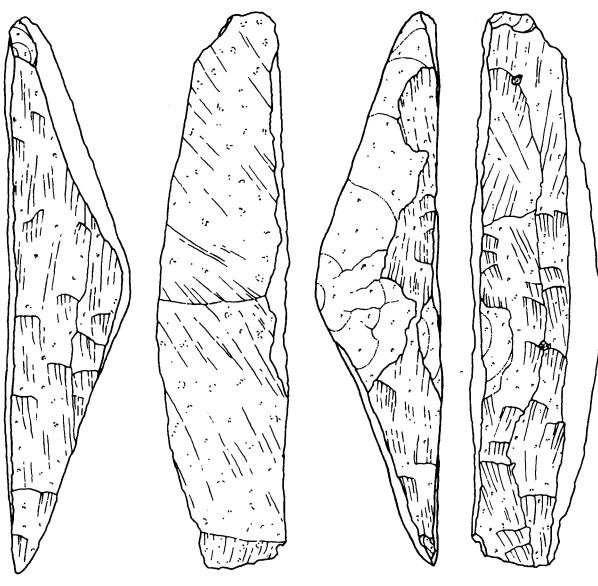
26
砥石状石器
粘板岩
検出面 No.28



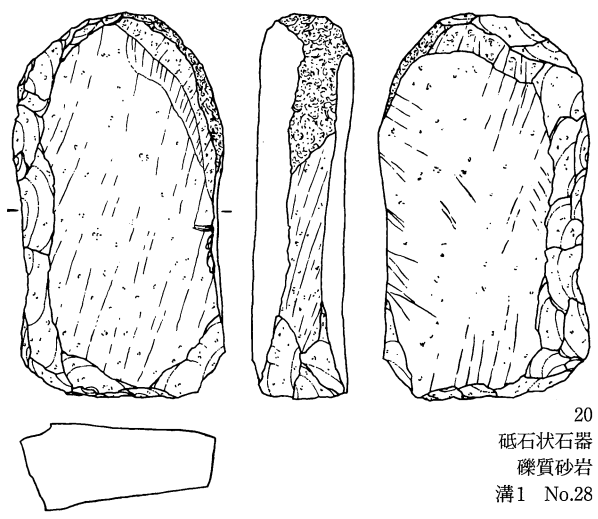
8
砥石状石器
凝灰質砂岩
5住 No.16



11
砥石状石器
泥質凝灰岩
6住 覆土



砥石状石器 凝灰岩 溝1 No.71



20
砥石状石器
礫質砂岩
溝1 No.28



図版13 石器

写真図版



全景（南から）



全景（北から）



全景（西から）

写真図版2



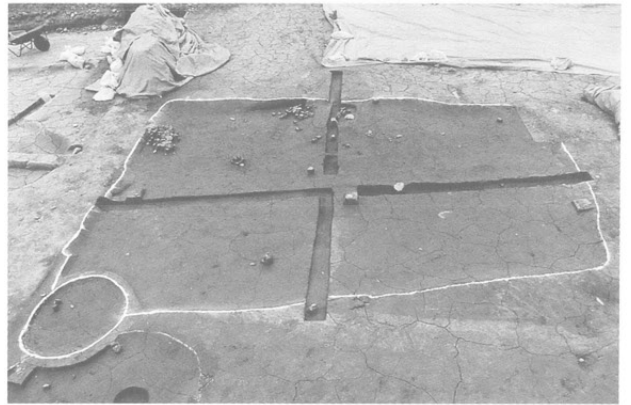
第4号住居址遺物出土状況



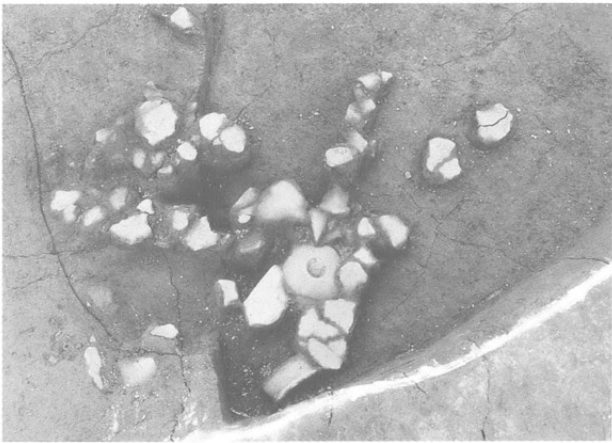
第4号住居址カマド



第4号住居址完掘



第5号住居址遺物出土状況



第5号住居址遺物出土状況



第5号住居址遺物出土状況 (有孔砥石)



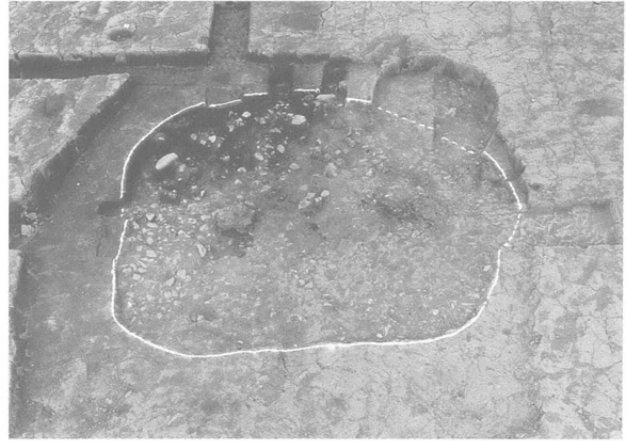
第6号住居址遺物出土状況



第6号住居址遺物出土状況



第7号住居址遺物出土状況



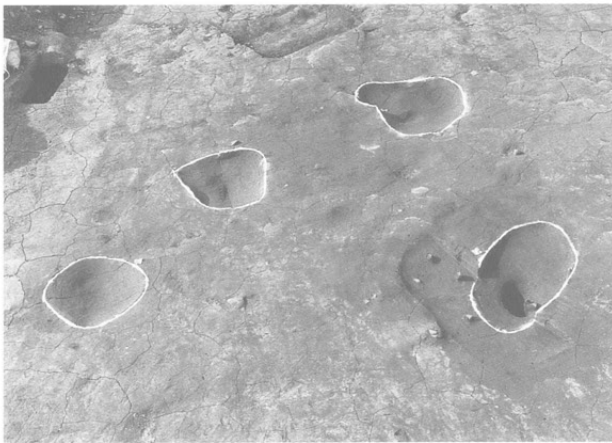
土器集中区 16



土器集中区 16



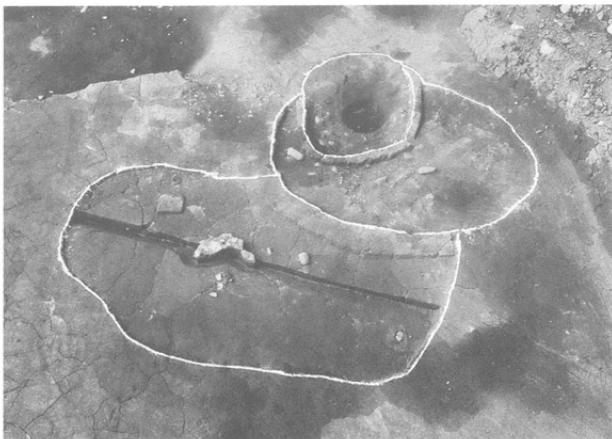
土器集中区 16



調査区北西隅土坑群



調査区北部ピット・土坑群



調査区東隅の土坑



調査団

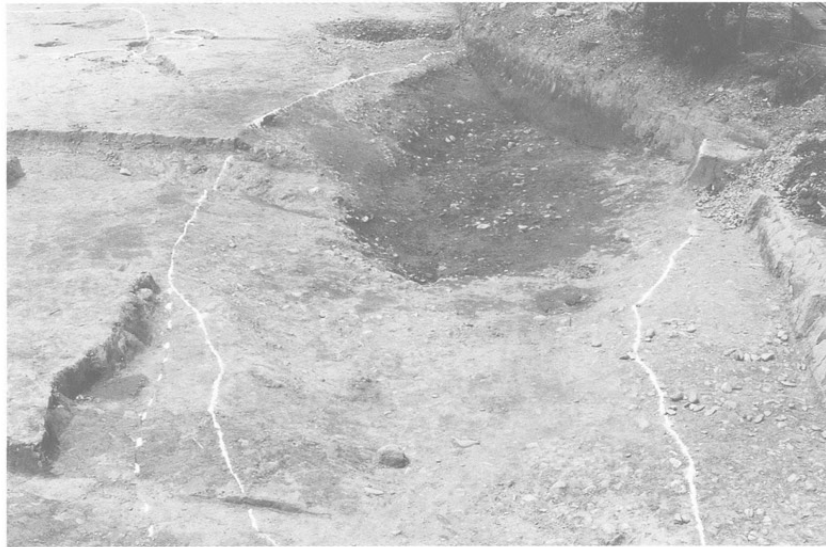
写真図版4



流路2遺物出土状況



流路2遺物出土状況



流路2完掘



作業風景



作業風景



8



33



10



35



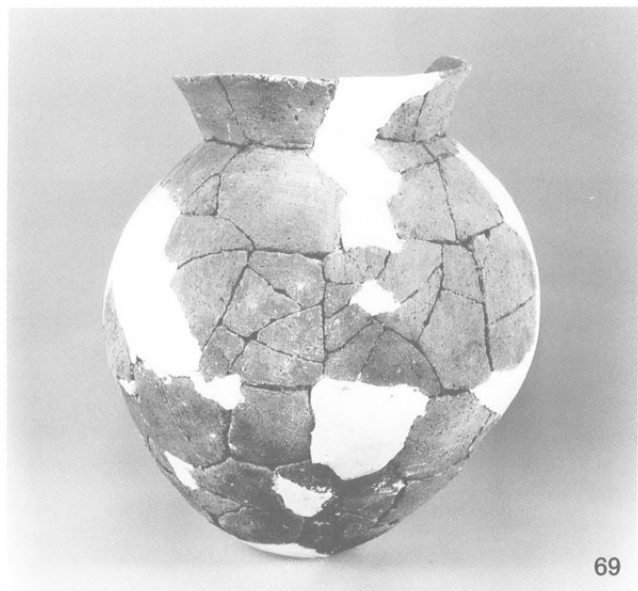
15



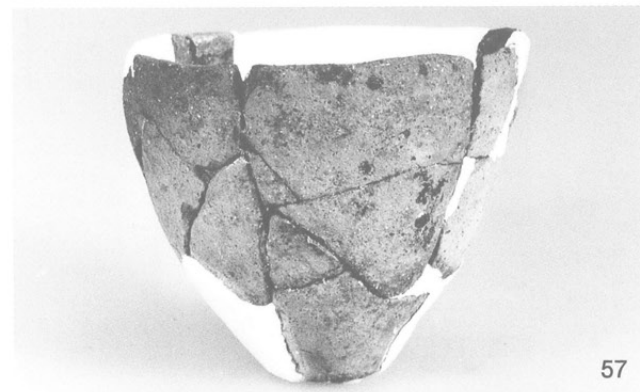
27



20



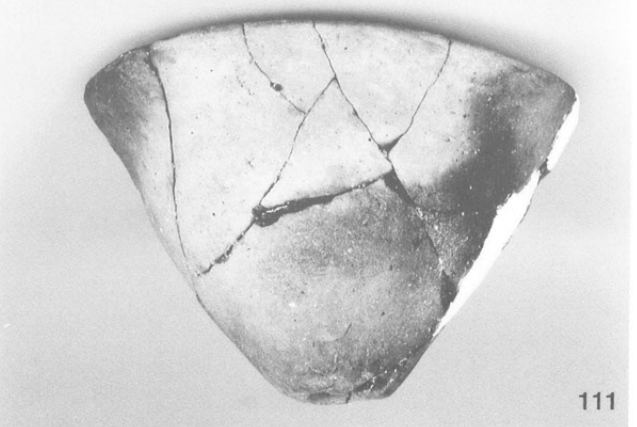
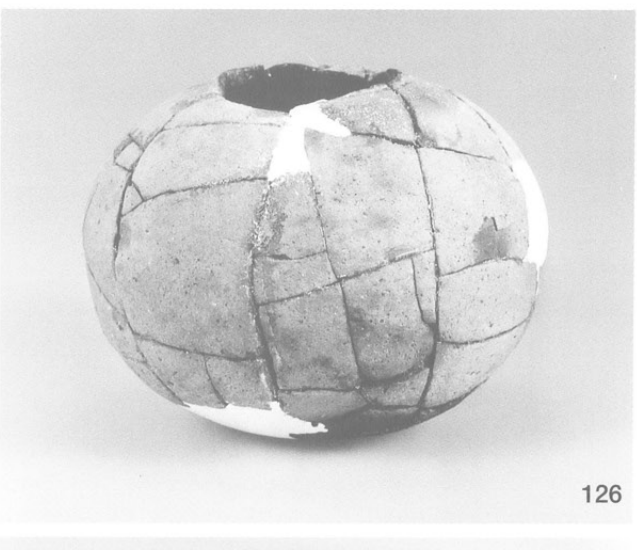
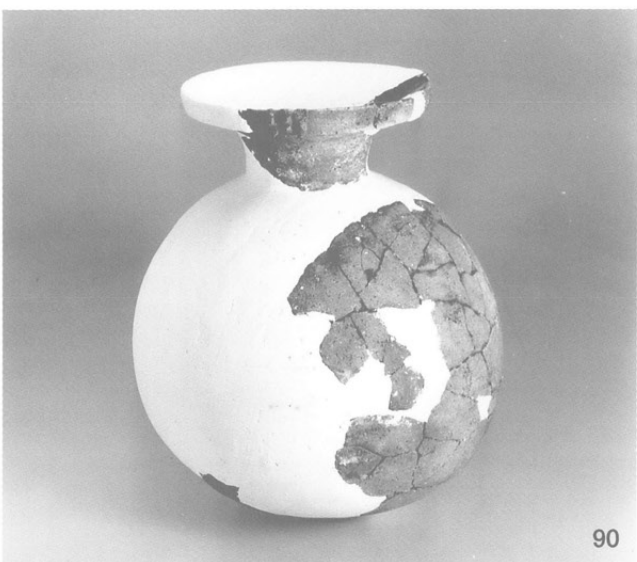
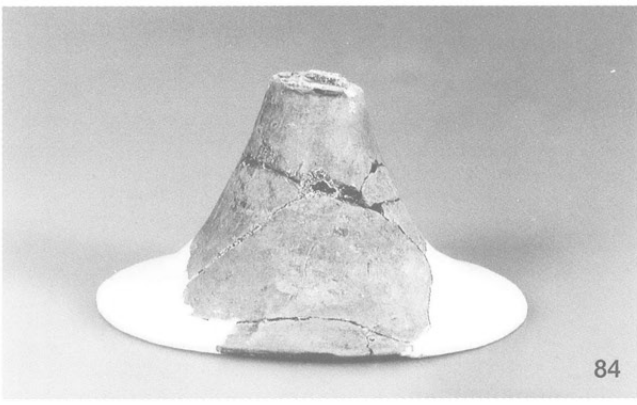
69



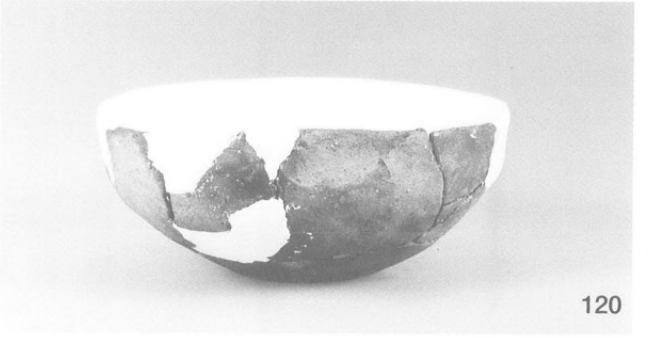
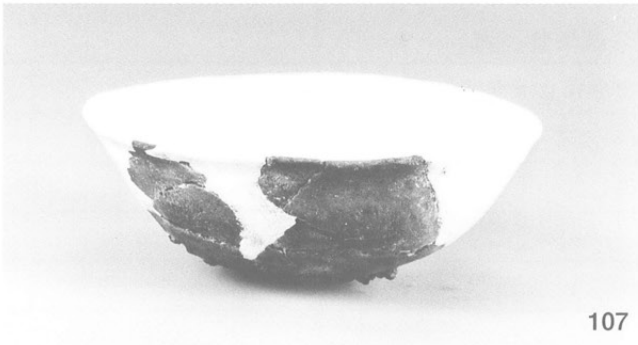
57

4住掘り方 (8・10) ・5住 (15・20) ・6住 (27) ・7住 (33・35) ・土31 (57) ・土48 (69)

写真図版6



流路2 (84~86・90)・土坑33 (65)・土器集中区16 (111)・検出面 (126)



土器集中区 16 (107~110・114) ・検出面 (119~121・127)

高宮遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしたかみやいせきⅡきんきゅうはくつちようさほうこくしよ							
書名	長野県松本市高宮遺跡Ⅱ 緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.136							
編著者名	直井雅尚・村田昇司・太田圭都・太田守夫							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市中山3738-1・TEL0263-86-4710)							
発行年月日	平成11年(1999)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかみや 高宮	ながのけん 長野県 まつもと 松本市 たかみやひがし 高宮東	20202	174	36度 12分 47秒	137度 57分 52秒	19980416～ 19980609	2,060	結婚式場・宿泊 施設建設に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高宮	集落跡	弥生～古墳	竪穴住居址	5軒	土器			
			流路	2条	(弥生土器・土師器・須恵器)			
			溝	1条	石器・石製品(砥石・白玉)			
			土坑・ピット	95基	ガラス製品(ガラス小玉)			
			土器集中区	1か所				

松本市文化財調査報告 No.136

長野県松本市

高宮遺跡Ⅱ

—緊急発掘調査報告書—

発行日 平成10年3月26日

発行者 松本市教育委員会

〒390-0873

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 総合印刷

